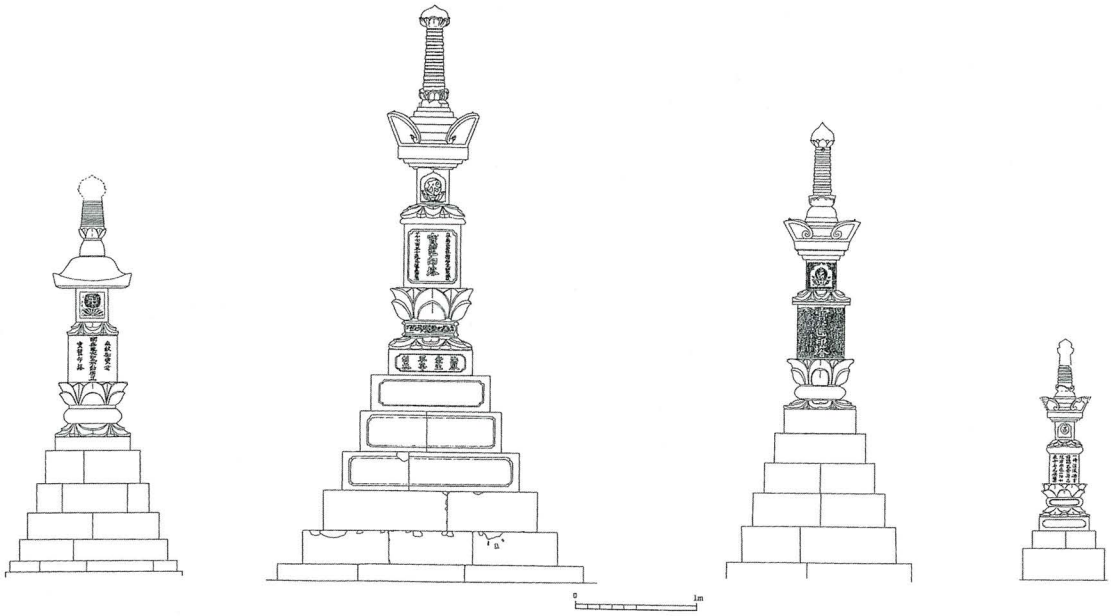
ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 52

富山市内石造物等調査報告書



富山市内各地の宝篋印塔

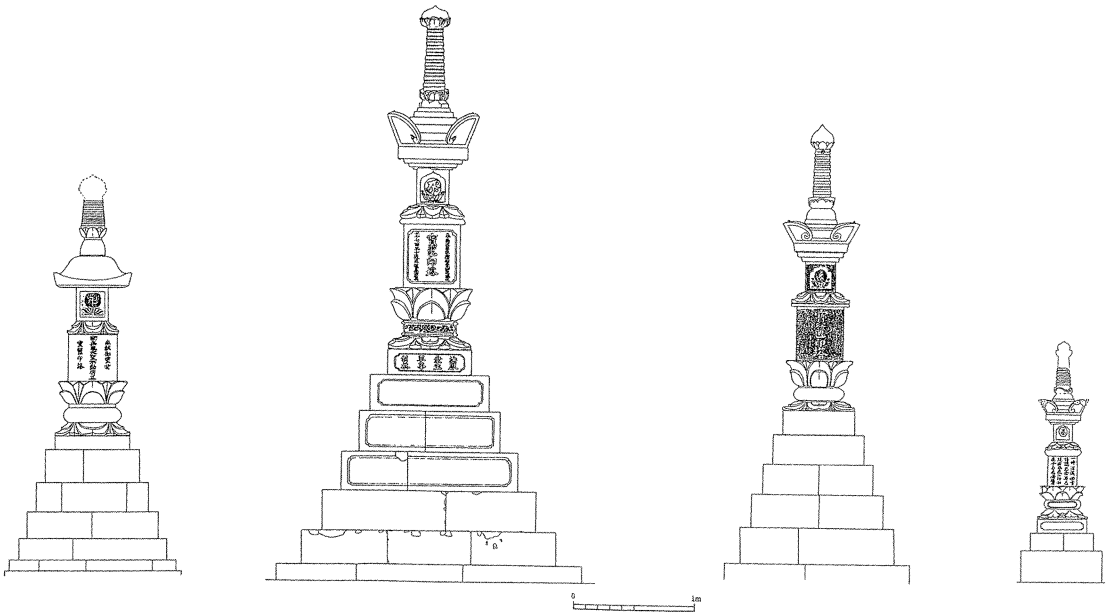
2012

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 52

富山市内石造物等調査報告書



富山市内各地の宝篋印塔

２０１２

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した市内に所在する石造物の調査及び測量調査等の報告である。

2　現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

尾田武雄、加藤達行、亀田正夫、久保尚文、小島俊彰、酒井省三、酒井靖春、中川嘉志馬、西井龍儀、平井一雄、福江　充、藤田富士夫、安田良栄、祇樹寺、光厳寺、西光寺、宝憧寺、龍高寺、富山市郷土博物館、富山県立図書館（順不同、敬称略）

3　本書に掲載した富山県立図書館所蔵絵図の使用掲載については、富山県立図書館の掲載許可を得ている。

4　本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行った。

目　　次

例言

Ⅰ　市内石造物調査

1　下番中川家宝篋印塔 …… 2

2　光厳寺中川家宝篋印塔 …… 12

3　西番田辺家墓地宝篋印塔 …… 21

4　深谷山祇樹寺関係石造物 …… 26

5　宝憧寺墓地石造物 …… 44

6　考察 …… 56

Ⅱ　布金山西光寺禅定窟測量調査 …… 61

報告書抄録 …… 67

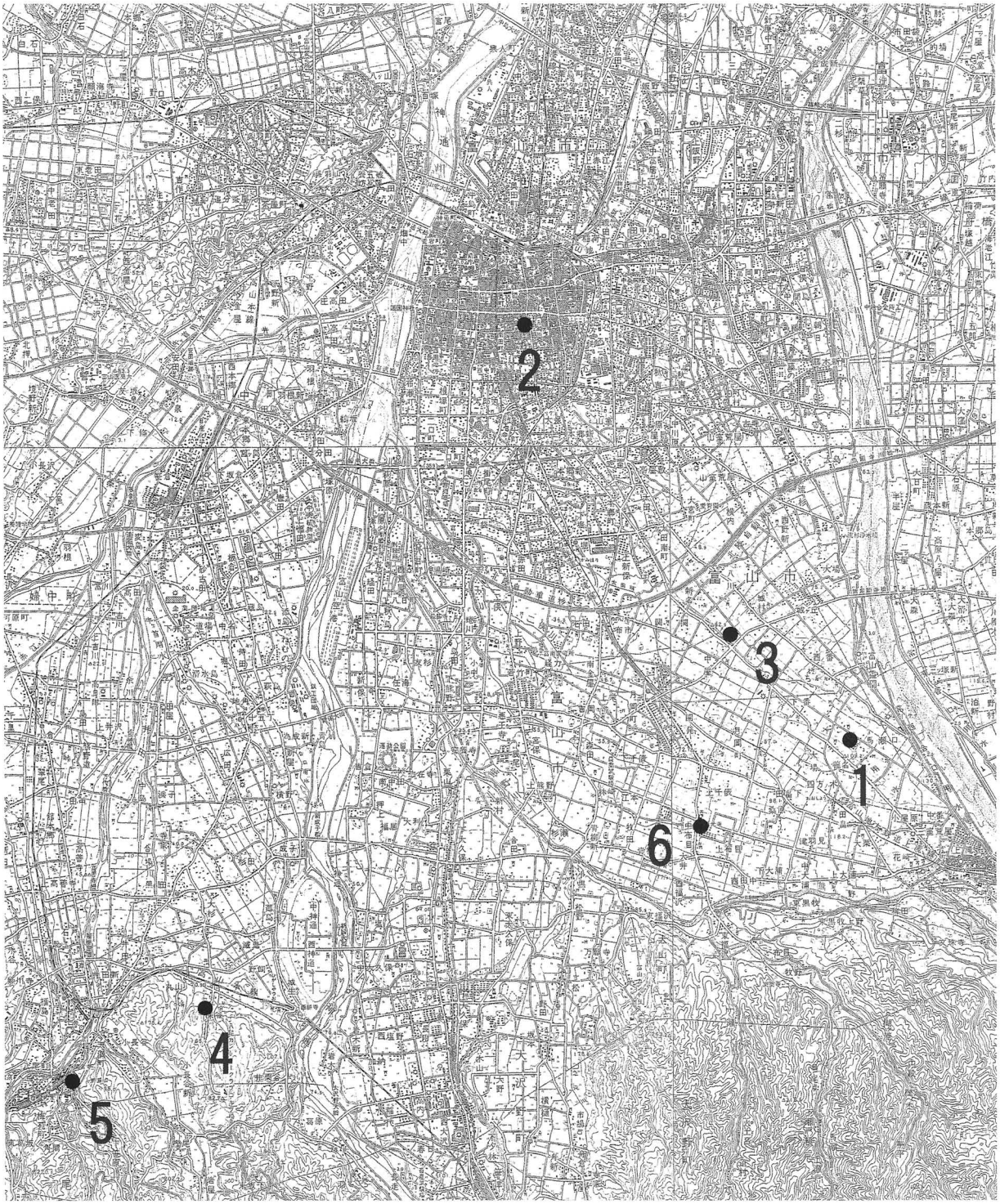


図１　調査位置図

１ 下番中川家墓地　２ 光厳寺中川家墓地　３ 西番田辺家墓地　４ 深谷山祇樹寺
５ 長栄山宝憧寺　６ 西光寺

Ⅰ　市内石造物調査

1　下番中川家宝篋印塔

(1) 調査の目的　　常願寺川石工製作の石造宝篋印塔の記録調査
(2) 調査日　　平成 23（2011）年 5 月 26 日～6 月 17 日（金）
(3) 調査者　　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　　富山市下番　中川嘉志馬家墓地
(5) 種別　　宝篋印塔
(6) 年代　　文政 3（1820）年
(7) 調査概要

①宝篋印塔の所在状況

この石塔は、中川家墓地内に所在する。墓地全体の形状は、東西 8.2m×南北 16.4mの南北に長い長方形で、宝篋印塔の所在する中川嘉志馬家墓地は、南半の東西 8.2m×南北 6.4mの東西に長い長方形地である。入口は東側で、手前中央に近年設置した墓、その西側に宝篋印塔が位置しており、入口からは奥側となる。石塔の正面は、南側となり、入口から見ると左側である（**写真 1**）。

墓地の南半は、外周を玉石積の基壇としている。かつてはこの基壇上に墓標が多く存在したが、それらは現在北側から東側にかけて築造されたコンクリート基壇上に移設された。順番等も変化した。

②全体構成　本石塔は、割玉石基壇とその上の石塔からなる（**図 1・表 1・写真 2**）。割玉石基壇は 2 尺 9 寸 7 分（90cm）、石塔本体は 7 尺 6 寸 5 分（231.7cm）、全高は 10 尺 6 寸 2 分（321.8cm）である。

石塔の構成は、上から、相輪・笠・塔身 5 段、基礎 2 段、基壇 3 段の計 12 段で構成する。相輪から基礎までは常願寺川産角閃石安山岩、基壇は安山岩である（**表 1**）。

③相輪　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の構成で、1 石で造る。宝珠は先端が小さく尖り、球形である。下端が最大径で 5 寸 5 分（16.7cm）。上部請花は単弁 8 葉の蓮弁で、弁周囲が盛り上がる。先端は丸みを帯びる。九輪は 1 輪目上端径 11cm、9 輪目下端径 16cm で下部径が大きい。下部請花は上部請花同様弁周囲が盛り上がる。先端内側は尖る。弁先端で相輪最大径を図る。伏鉢は 1 段で、やや丸みを帯びる。下段伏鉢下端径は 5 寸 6 分（17cm）である（**写真 3**）。

④笠　軒上 5 段、軒下 2 段である。隅飾突起は約 40°の角度で外側へ広がり、内側は単純な弧状

表1　下番中川家墓地宝篋印塔の規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	相輪	17.5	53	7	21.2	角閃石安山岩	
笠	笠	6	18.2	16	48.5	角閃石安山岩	
塔身	軸1	6.3	19.1	6	18.2	角閃石安山岩	四面に梵字種子
	反花	1.55	4.7	9.6	29.1	角閃石安山岩	
	軸2	9.75	29.5	9.6	29.1		四面に梵字種子・銘文等
	請花	4.7	14.2	14.2	43	角閃石安山岩	
	饅頭形	4.5	13.6	12.7	38.5	角閃石安山岩	四面に文様（祥雲文・波濤文）
基礎	反花	2.6	7.9	9.6	29.1	角閃石安山岩	
	基礎	3.2	9.7	9.6	29.1		四面に文様（波濤文・花文）
基壇	基壇1	6.7	20.3	20	60.6	安山岩	板石、北面に蓋石
	基壇2	8.2	24.8	24.1	73	安山岩	板石
	基壇3	5.5	16.7	28	84.8	安山岩	板石
計		76.5	231.7				

となる。突起内の文様は、輪郭を巻いた弧下端が小さな渦巻状となり、内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により凹凸を表現する（**図5・写真3～5**）。

⑤塔身　4石5段で構成される。上から軸1、反花、軸2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸2を1石で造る（**図2・3**）。

A　軸1　方形石の四面に梵字種子を彫る。月輪を浮彫し、その中央に薬研彫で陰刻した梵字種子を配する。月輪下は、3葉の素弁の蓮弁の下に大きな祥雲文を配置する。祥雲は3個で、その巻き方は、南面：右・左・左、西面：左・左・右、北面：右・左・左、東面：左・右・右となり、両端から尾を伸ばし、月輪を挟む文様となる。ただし南面の左側祥雲の尾は省略されている。これは、その祥雲が本来左巻としなければならないところ、右巻としたため、モチーフ上尾を表現できない形になってしまったためと考えられる。

4つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味すると理解されている。四仏は通常定まった方位に配置される。北面は不空成就如来（梵字種子：アク）東面は阿閦如来（梵字種子：ウーン）、南面は宝生如来（梵字種子：タラーク）、西面は阿弥陀如来（梵字種子：キリーク）である（**写真3・6**）。

しかし本石塔では、北に阿弥陀如来、南に阿閦如来、西に宝生如来、東に不空成就如来が配置されている。元来形とは90度時計回り（右回り）ずれた姿である。したがって、一度転落あるいは修理等の際に方向を誤って復元されたものと推定される。

B　反花　軸2と1石で造る。主弁は単弁8葉で、主弁間に稜をもつ間弁を置き、計16弁で構成される。蓮弁の先端は尖っている。

C　軸2　方形石の四面には刻銘があり、銘文は陰刻で彫る。正面となる南面には、中央に梵字種子「シッチリヤ」を筆書き体で大きく彫り（**写真7**）、右に「文政三庚辰天」左に「五月大善日」とある。シッチリヤは宝篋印陀羅尼を示す梵字種子とされるが、詳細は不明である。庚辰は、文政3（1820）年の干支で、大善日は吉日と同意である。東面には5行にわたる楷書体の銘文がある。「奉書写大乗妙／典一石一字三禮／并宝篋印陀羅尼／石書御経数巻／為施主滅罪生善」（**写真8**）。この銘文は『宝篋印陀羅尼経』にはなく、願主等（導師か）が作成した願文である。西面にも東面同様、5行にわたる銘文がある。「若有有情能於／此塔一香一華／礼拝供養八十／億劫生死重罪／一時消滅云云」。この文は、宝篋印陀羅尼経（大正新脩大藏經 No. 1022B）第19.0713b19～21段からの引用である。云云以下は省略されている。北面には、梵字34文字が7行にわたり彫られる。中央行となる5文字は、「ア・ビラ・ウン・ケン」で、大日報身真言である。報身とは、仏身論の一つにある「三身論」（法身・報身・応身）のうち、菩薩として因意にあった時に立てた願と修行とに報いて、その結果表れた受楽の仏の意である〔徳山1976〕。この面においては、大日報身真言を中心に置き、右に3行、左に3行光明真言を2つに分けて配置している。大日報身真言の右の梵字3行は、光明真言23文字（休止符を入れると24文字）のうち、最初から15文字目、ハンで終了している。光明真言とは密教における灌頂に際しての聖句で、日常誦持する代表的な明呪であって、大日如来に対して祈願する内容である。この3行における光明真言の文字順は、中央→左下→右→中央→左下とジグザクに下へ進む読み方となっており、3行で光明真言を表記する場合の標準的な方式を踏襲したものである（図2）。大日真言の左側3行は、右側3行の光明真言の続きで、16文字目のドマから始まる。右側同様にジグザグに進み、23文字目のウンが上から6段目左端に来て終わる。休止符

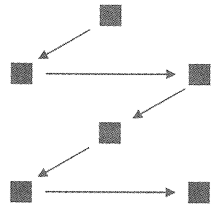


図2　光明真言3行の読み順

はない。その後には５文字が続く。この５文字は「ハツ・タ・ソワ・カ・終止符」で、ハツ・タ、ソワ・カはいずれも末尾語である。ハツ・タはハッタとも呼ばれ、「一切」等の強調を意味する。ソワ・カは「成就吉祥、幸あれ、成就してあれ」等の意味がある。この組み合わせ表記はあまり見られないが、大日報身真言・光明真言の末尾に付けることにより、これらの成就を願ったものと推測する。

Ｄ　請花　　１石で造る。主弁は単弁８葉で、主弁間に稜をもつ間弁８葉を置き、計 16 葉で構成される。蓮弁の先端は尖っている。主弁の幅５寸６分（17cm）、高さ４寸７分（14.2cm）で、横幅のほうがやや広く表現する（**写真 9**）。

Ｅ　饅頭形　　１石で造る。平面形は四角形で、側面は半円形である。側面は、楕円形に浅く彫り込んだ中に、文様を浮彫する。正面の南面は祥雲文、西面は波濤文、北面は祥雲文、東面は波濤文＋点文である。それぞれ相対する面が類似した文様となっているが、南北面は、東西面とは波頭の位置と点文の有無の相違が認められる（**写真 10**）。

⑥基礎　　２段からなる。上段の反花と下段の方形石は１石で造られる。刻銘はない。反花は主弁が単弁 8 葉で、間弁をもつ。主弁の弁周縁は、やや盛り上がる。主弁・間弁とも弁先端には、小さな縦長の凹みが刻まれることが特徴である。方形部には、４面に文様を浮彫りする。正面となる南面は蓮華の花文・葉文、西面は蓮華の花文・葉文である。南面と西面の相違は、南面が蕾と散った後の実をあわせて描き、西面はすべて満開の花を描いている。北面は波濤文で波頭は中央と右側にある。東面は波文と波に浮かぶ三葉文（笹？）である（**図４・写真 10**）。

⑦基壇　　切石 14 石を組み合わせた基壇３段がある。各段の切石数・幅・高さ等は、表２のとおりである。特徴としては、幅と奥行きがほぼ同じで、下方ほど高さが高くなることがあげられる。

切石単体の規格等は表３のとおりである。切石の横幅は、最小１尺６分（32.1cm)から最大２尺７分５厘（62.9cm）である。上段は最小１尺６分（32.1cm)から最大２尺（60.6cm）、中段は最小１尺９寸３分５厘（58.6cm)から最大２尺（60.6cm）から最大２尺７分５厘（62.9cm）、下段は最小１尺２寸５分（37.9cm)から最大２尺（60.6cm）から最大１尺８寸３分５厘（55.6cm）である。

切石の積み方は、上段は正面となる南面に１石を渡し、東西面は北面に小口が見えるように置く。北面はその間を埋める石とし、その埋め石の東端に、礫石経投入口を設ける。その大きさは縦２寸３分（7cm）×横 3 寸（9.1cm）の方形で、そこには蓋石を入れているが、この蓋石は後年取替えられたものである（**写真 11・12**）。なお中川氏によれば、かつて故人の遺品等を投げ入れていたという。中段は同寸の４石を組む。下段は、南北面に 2 石を置き、東西面は間を埋

表2　基壇規格

段数	切石数	横幅		奥行		高		部材番号
		寸	cm	寸	cm	寸	cm	
1段目	4	20	60.6	20	60.6	6.7	20.3	1～4
2段目	4	24.1	73	24.2	73.3	8.2	24.8	5～8
3段目	6	28	84.8	27.8	84.2	5.5	16.7	9～14
計	14							

表3　基壇切石規格一覧

段数	部材番号	位置	長		高		厚		石材	備考
			寸	cm	寸	cm	寸	cm		
上段	①	南面	20	60.6	6.7	20.3	4.3	13	安山岩	
	②	西面	15.7	47.6	6.7	20.3	4.7	14.2	安山岩	
	③	北面	10.6	32.1	6.7	20.3	4.5	13.6	安山岩	東側に投入穴穿孔
	④	東面	15.7	47.6	6.7	20.3	4.7	14.2	安山岩	
中段	⑤	南面	19.35	58.6	8.2	24.8	4.2	12.7	安山岩	
	⑥	西面	20	60.6	8.2	24.8	3.2	9.7	安山岩	
	⑦	北面	20.75	62.9	8.2	24.8	4	12.1	安山岩	
	⑧	東面	20.1	60.9	8.2	24.8	4.7	14.2	安山岩	
下段	⑨	南面	14.4	43.6	5.5	16.7	6	18.2	安山岩	
	⑩	南面	13.6	41.2	5.5	16.7	4.85	14.7	安山岩	
	⑪	西面	18.35	55.6	5.5	16.7	不明	不明	安山岩	
	⑫	北面	12.5	37.9	5.5	16.7	4.35	13.2	安山岩	
	⑬	北面	15.5	47	5.5	16.7	4.5	13.6	安山岩	
	⑭	東面	17.3	52.4	5.5	16.7	不明	不明	安山岩	
計	14石									

める 1 石を詰めている。下端面は各石異なっており、現状では割玉石基壇との隙間をコンクリートで埋めて高さを揃えている。各段ともに正面の見栄えを優先した置き方である。各板石の表面はビシャン叩きにより平滑に仕上げている。

⑧割玉石基壇　下が広がる台形状である。割玉石の割面を表面とし、各面 20 石余りを積む。各石の接合面はコンクリートで充填されている。

⑨石材　石塔部材・基礎・切石基壇・割玉石基壇ともに安山岩を原材とする。安山岩には大別して以下の 3 種がある。

A：常願寺川産の角閃石安山岩

B：大粒の白色長石を含む安山岩

C：混入物のない安山岩

基礎より上はA、切石基壇はB、割玉石基壇はCである。B・Cの産出地は直近の常願寺川ともみられるが確定できていない。

⑩補修痕跡　各部材はほぼ造立当初のままとみられるが、軸 2 の方向のズレからみて、少なくとも軸 2 より上は一度解体されているとみられる。割玉石基壇は、造立当初から存在したかどうか不明である。文化年間以前は、切石基壇の最下段が地面に接する事例が多いが、それらは 4 ～ 5 段と段数が多く、本例のような 3 段と段数が少ない場合、下に石積みによる基壇が追加されていた可能性がある。

⑪内部の状況　礫石経投入口の蓋石を外し、内部の状況を写真で確認したところ、基壇内とみられる下方に、素焼きの小形の甕形土器と、その下に小石が多数所在する状況が見られた（**写真 12**）。甕形土器は蓋がなく、上部が割れており、内部には黒い玉状のものが見えることから、骨蔵器ではなさそうである。大きさは判然としないが、投入口より大きい器物と見られることから、石塔組み上げ後に投入口から入れることは不可能であり、後の修復等で解体された際に入れられたものであろう。小石はその下に多数認められる。大きさは 5～10cm 位と推定される。この大きさの小石はこれまで東薬寺（富山市牧野、江戸後期）や龍高寺（富山市月岡、江戸後期）の宝篋印塔内から出土した礫石経〔古川・伊集 2008、古川・蓮沼 2009〕と似た大きさであり、礫石経の可能性が高い。

(8) 石塔の造立目的とその背景

本石塔は文政 3 年造立された。この年代は、初代甚右衛門期と考えられ、もっとも力量を発揮していた時期に当る。石塔に石工名はないが、基本構成、軸 1 の意匠、饅頭形や基礎の文様意匠は甚右衛門作宝篋印塔と近似しており、甚右衛門作とみることができる。

軸 2 東面の銘文は、「奉書写大乗妙典一石一字三禮并宝篋印陀羅尼石書御経数巻為施主滅罪生善」とあり、これが造立の願意である。すなわち、宝篋印陀羅尼経を書写した礫石経を納め、施主（願主）の現世での罪を滅ぼすことを意図したものである。内部の写真から、塔の板石基壇内部には、礫石経が納められている可能性が高く、造立目的とされた「一石一字」の礫石経が銘文のとおり奉納されていることになる。この意味で、この宝篋印塔は当初より宝篋印陀羅尼経が示す供養塔としての性格を持ったもので、供養塔としての性格を現在でもそのまま維持している。施主の名前は見当たらない。造立された文政 3 年に中川家家長となっていた人物であろう。

造立の契機は、中川家当主等の重要人物に関わる回忌（三回忌、三十三回忌等）が推測されるが、現在のところ不明である。下番中川家は、馬瀬口村中川家とは血縁関係をもつ一族である。宝篋印塔が造立された文政 3 年は甚右衛門の活躍期間であり、あえて石工名を刻銘しなかったとすれば、中川家当主が甚右衛門と近い関係の血縁者であったと推測しておきたい。

なお、下番中川家によると現在馬瀬口村中川家後裔とは親戚関係はないという。しかし、両家の家紋は同じ「丸に桔梗」紋であり、幾代か前の先祖において関係の高い一族であったと考えられる。

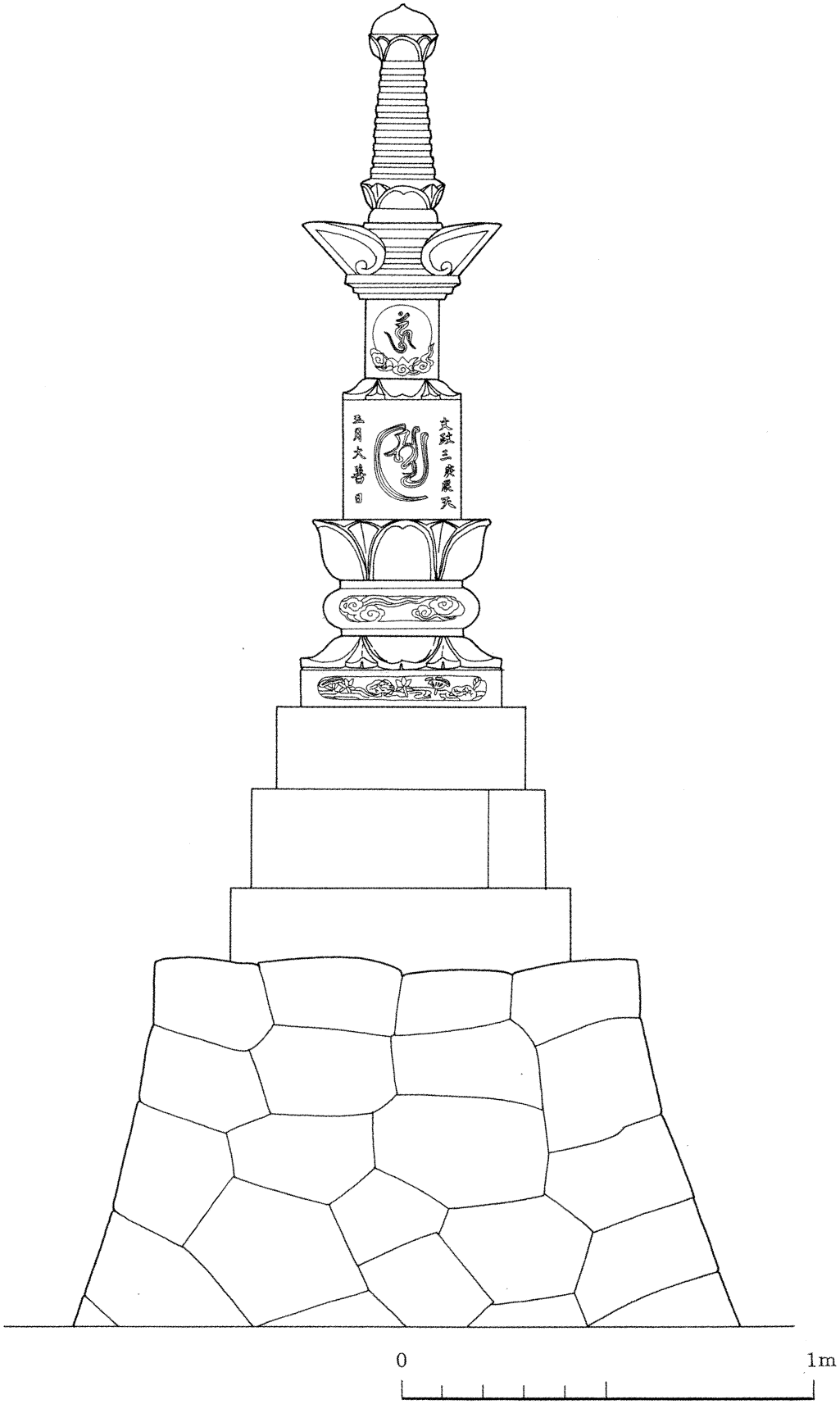
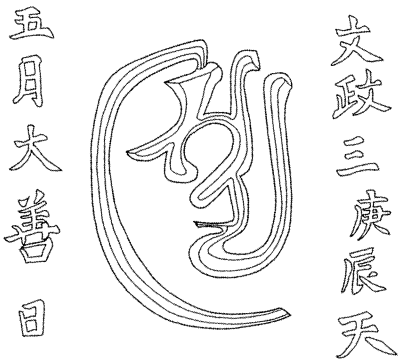


図１　下番中川家宝篋印塔

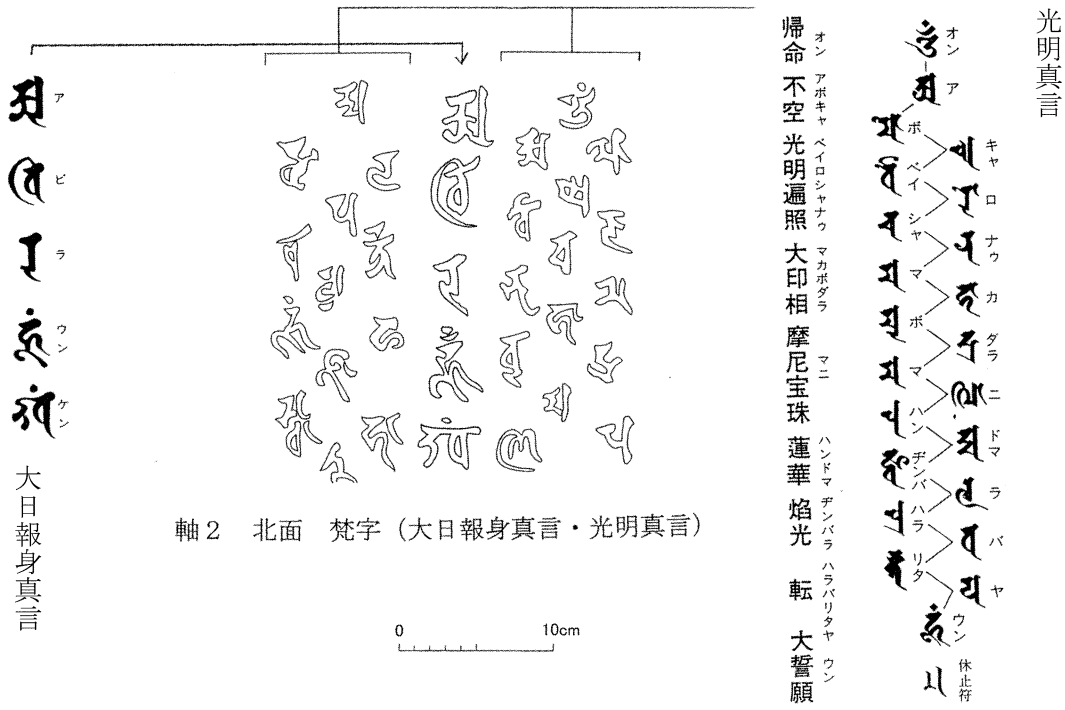
軸１　南面梵字ウーン（阿閦如来）



軸２　南面梵字サトバン（宝篋印陀羅尼）・年号

軸２　東面　願文

軸２　西面　宝篋印陀羅尼経文（部分）

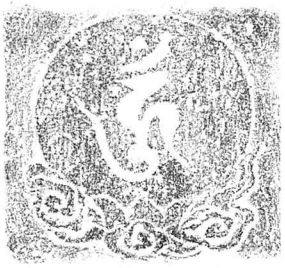


軸２　北面　梵字（大日報身真言・光明真言）

図２　軸１・２銘文実測図

梵字は『梵字手帖』より引用加工

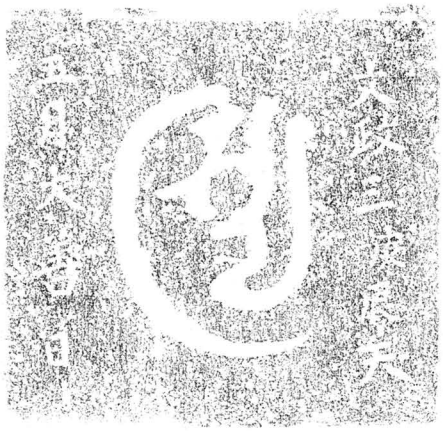
軸１西面　梵字タラーク（宝生如来）　拓影



軸１南面　梵字ウーン（阿閦如来）　拓影

軸１南面　梵字アク（不空成就如来）　拓影

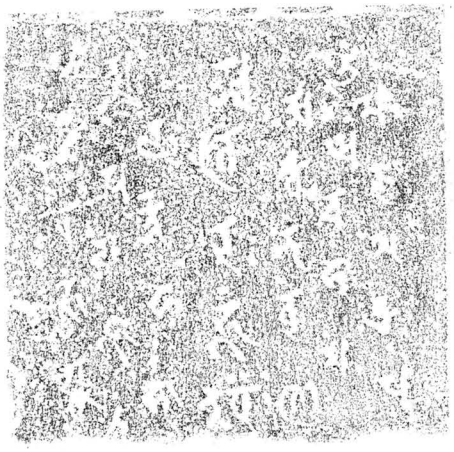
軸１北面　梵字キリーク（阿弥陀如来）　拓影



軸２南面　梵字サトバン（宝篋印陀羅尼）・年号　拓影

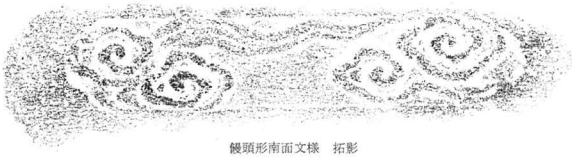
軸２西面　宝篋印陀羅尼経文（部分）　拓影

0　10cm



軸２北面　梵字（大日報身真言・光明真言）　拓影

軸２西面　願文　拓影



饅頭形南面文様　拓影

饅頭形北面文様　拓影

饅頭形西面文様　拓影

饅頭形東面文様　拓影

0　10cm

図３　軸２刻銘・饅頭形浮彫文様拓影

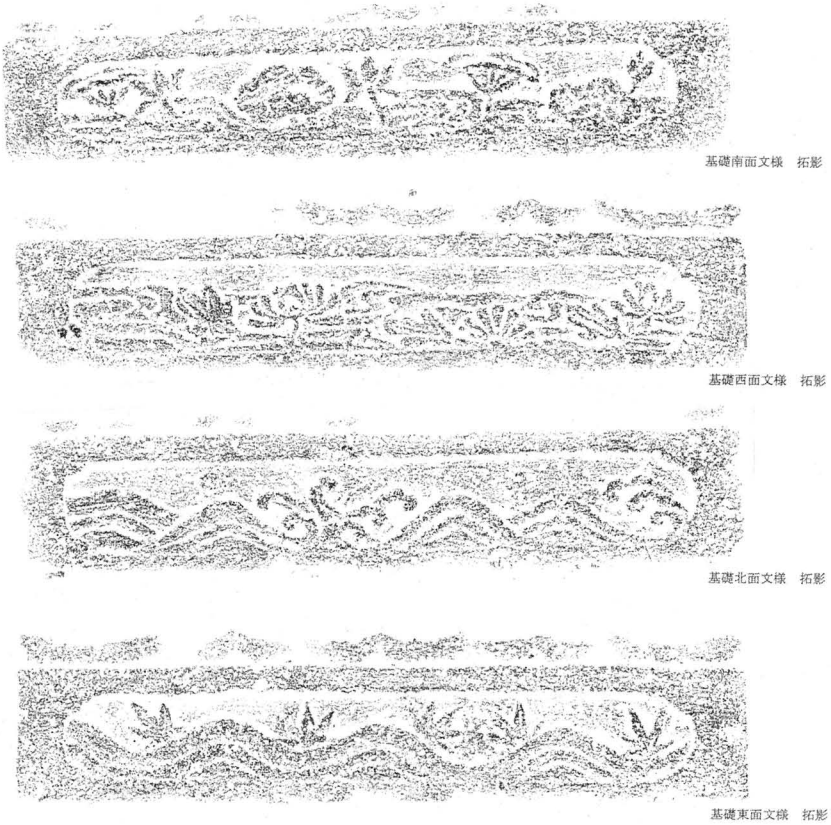


図４　基礎浮彫文様拓影

図５　笠隅飾突起拓影

0　10cm

写真１　中川家墓地全景

写真２　宝篋印塔全景

写真３　相輪・軸

写真４　笠上面

写真５　隅飾突起側面

写真６　軸１梵字

写真７　軸２南面梵字

写真８　軸２東面刻銘

写真９　請花蓮弁細部

写真 10　饅頭形・基礎の浮彫文様

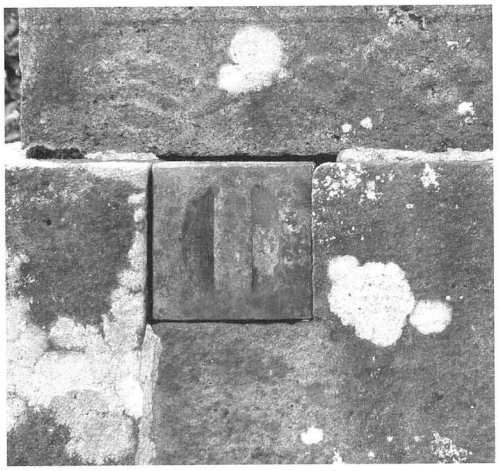


写真 11　礫石経投入口蓋石

写真 12　礫石経投入口蓋石

写真 13　内部状況

2　光厳寺中川家宝篋印塔

(1) 調査の目的　常願寺川石工製作の石造宝篋印塔の記録調査

(2) 調査日　平成 23（2011）年 5 月 27 日～6 月 10 日

(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）

(4) 所在地　富山市五番町 7－37 曹洞宗春日山光厳寺墓地内　中川家個人墓地

(5) 種別　宝篋印塔

(6) 年代　安政 3（1856）年

(7) 調査概要

①宝篋印塔の所在状況

この石塔は、光厳寺（**写真 1**）本堂東側に広がる同寺檀家墓地内に所在する。墓地は、東西 40m、南北 70mの方形状で、石塔はその北西部に所在している。

石塔は、中川家個人墓地内に墓石として建っており、西面が正面となる。石塔前の入口には、左右にコンクリート製の小形燈籠が置かれる。

富山市五番町に所在する曹洞宗春日山光厳寺本堂裏の墓地内に、中川家個人墓地がある。この墓地内に宝篋印塔が存在するが、現在墓石として転用されている。西面を正面とし、入口左右にはコンクリート製の小形燈籠が置かれる。

②全体構成　本石塔は、花崗岩製切石基壇とその上の石塔からなる（**図 1・表 1・写真 2**）。基壇はコンクリート上に構築されており、近年改修されたものとみられる。切石基壇は高さ 95cm、本体高さは 225.8cm（7 尺 4 寸 5 分）、コンクリート面からの全体高 320.8cm である。

石塔の構成は、上から相輪、軸 1、笠、塔身（4 段）、基礎、基壇（3 段）、切石基壇であるが、本来塔身である軸 1 は、元来の位置とは異なった位置に置かれており、これを復元すると、相輪、笠、塔身（5 段）、基礎、基壇（3 段）、切石基壇となる。切石基壇は後補とみられる。

③相輪　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢となる。これらは 1 石で造る。宝珠は半球形で、最大径は最下端である。上部請花は主弁 6 弁・間弁 6 弁の 12 弁である。弁の縁はやや盛り上がり、先端は肥厚する。九輪は 1 輪目上端径 11cm、9 輪目下端径 14cm で、下のほうの径が大きい。下部請花は上部請花と同様である。伏鉢は算盤玉形となる。伏鉢の最大径が相輪の最大径となる（**写真 3～5**）。

④笠　軒上 5 段、軒下 2 段である。隅飾突起は約 50°の角度で外側へ広がり、内側は弧状となる。隅飾突起内外面の文様は、輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となり、内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する（**写真 6・7**）。

⑤塔身　4 石 5 段で構成する。上から軸 1、反花、軸 2、請花、饅頭形となる。反花と

表1　光厳寺中川家墓地宝篋印塔の規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	相輪	16.7	50.6	6	18.2	角閃石安山岩	
笠	笠	6	18.2	15.75	47.7	角閃石安山岩	
塔身	軸1	6.4	19.4	6	18.2	角閃石安山岩	四面に梵字種子
	反花	1.7	5.2	9.7	29.4	角閃石安山岩	
	軸2	10.25	31.1	9.7	29.4		三面に梵字種子・銘文等
	請花	5	15.2	14.2	43	角閃石安山岩	
	饅頭形	3.8	11.5	12.3	37.3	角閃石安山岩	
基礎	反花	2.6	7.9	15.4	46.7	角閃石安山岩	
	基礎	3.5	10.6	15.4	46.7		
基壇	基壇1	5.3	16.1	18.8	57	角閃石安山岩	板石
	基壇2	8.7	26.4	22.7	68.8	安山岩（赤系）	板石。四面に銘文
	基壇3	4.5	13.6	26.1	79.1	安山岩（赤系）	板石
計		74.45	225.8				

その下の軸２を１石で造る。

Ａ　軸１　先述のように、軸１は元来笠と反花の間に置かれるが、本石塔では相輪と笠の間に置かれている。これは修理の際、誤った位置に復元されたためと推定される。方形石の四面に梵字種子のみを薬研彫で陰刻する。４つの梵字種子は、金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。本石塔では、いったん移動しているが、方位どおり配置されている。なお、北西下隅が大きく割れており、ややずれた状態でモルタル補修されている（**写真４・８**）。

Ｂ　反花　軸２と１石で造る。主弁は単弁８葉で、主弁間に単弁８葉の間弁を置き、計16葉で構成する。蓮弁の先端は尖る。

Ｃ　軸２　方形石の四面に銘文を陰刻で彫る。正面となる西面には、中央にやや小さく梵字種子「シッチリヤ」を薬研彫で陰刻する。左面となる北面に「草木国土／悉皆成仏」、右面となる南面に「一仏成道／観見法界」と、８文字×２行で楷書で陰刻する。「一仏成道観見法界　草木国土悉皆成仏」の句は、『摩訶止観論弘決纂義』及び鎌倉時代の天台僧証真の編纂になる『止観私記』巻第一中に、「中陰経」からの引用としてこの語句の存在が示されるほか（光厳寺のご教示による）、室町期以降の能の謡曲に多く表現される句である。起源は不明であるが、天台宗の思想の一つとして、草木も自ら発心・修行・成仏するといった自然観とされており、広く民衆にも広がったとされている。裏面となる東面には刻銘はない（**写真９・10**）。

Ｄ　請花　１石で造る。主弁は単弁８葉で、主弁間に単弁８葉の間弁を置き、計16葉で構成する。弁の周縁はやや盛り上がり、先端は尖り気味に前へ出る（**写真11**）。

Ｅ　饅頭形　１石で造る。平面形は四角形で、側面は楕円形である。表面に文様はない（**写真12**）。

⑥基礎　２段からなる。上部の反花とその下の方形石を１石で造る。反花は、主弁が単弁８葉で、間弁をもつ。主弁の弁周縁は盛り上がり、弁先端は尖って大きく反る。弁先端は平らである。基礎方形部に刻銘・文様はない（**写真13**）。

⑦基壇　板石12石を組み合わせ、３段で構成する（**写真14～17**）。このうち上から３段目に銘文を陰刻する。正面となる西面中央には、天地いっぱいに「三界万霊」と楷書で陰刻があり、本石塔の願意を示す。裏面となる東面には、「当村／願主／中川／甚右衛門」とあり、本石塔の製作を発願した人物が中川甚右衛門であることが示される。甚右衛門は、馬瀬口村（現富山市馬瀬口）出身者であることから、当村は馬瀬口村のことを指す。左面となる北面には６行の楷書による陰刻がある。「先祖代々／為／精霊菩提／徳山是入居士／玉葉連光比丘尼／釈　教随／釈尼妙運」である。頭の３行は、先祖の菩提供養のため（造立した）という意味であり、本石塔造立の直接的動機を示す。右面となる南面には２行の楷書による陰刻がある。「安政三丙辰年／三月建之」とあり、本石塔の造立年月を示す。

各段の切石数と幅は次のとおり。

上段：４石　横１尺８寸８分（57cm）、奥行同寸法、高さ５寸８分（17.6cm）

中段：４石　横２尺２寸７分（68.8cm）、奥行２尺２寸８分（69.1cm）、高さ８寸７分（26.4cm）

下段：４石　横２尺６寸１分（79.1cm）、奥行同寸法、高さ４寸５分（13.6cm）

切石単体の長さは、最小５寸２石の他は、１尺６寸５分（50cm）から最大１尺９寸３分（58.5cm）である。表２に切石単体の規格一覧を示す。板石の積み方は、上段は西面（正面）と東面に２石を渡し（部材①③）、南北面は横幅が短い１石を詰めており（部材②④）、正面の見栄えを優先した積み方である。部材③の南小口面右下部には、横2.6寸（7.9cm）×縦2.3寸（7cm）の長方形の穴が穿たれるが、コンクリートで埋められている。元来、礫石経を投入する投入口であったとみられる（**写**

真 18)。中段は同寸の４石を組む。下段も同寸の４石を組むが、中段は石材の小口面が向かって右側に見えるのに対し、下段では反対の左側になるという違いがある。板石の表面はビシャン叩きにより、ざらついた簾状の平面に仕上げる（写真 19)。石材は、上段の 4 石が角閃石安山岩、中・下段の 8 石は淡赤色の安山岩である。

⑧切石基壇　下が広がる台形状である。方形状の花崗岩切石を布積し、各面 10 石を積む。各石の接合面はコンクリートで充填する。最上部には一回り大きな板石を置く。この切石組の上に石塔を載せる。正面には、中央に中川家家紋「丸に桔梗」を浮彫した花立を取り付けるが、後補である。

表2　基壇切石規格一覧

段数	部材番号	位置	長		高		厚		備考
			寸	cm	寸	cm	寸	cm	
上段	①	西面	18.8	57	5.3	17.5	7	21.2	
	②	北面	5.1	15.5	5.3	17.5	不明	不明	
	③	東面	18.8	57	5.3	17.5	6.8	20.6	南面に投入穴穿孔
	④	南面	5	15.2	5.3	17.5	不明	不明	
中段	⑤	西面	17.6	53.3	8.7	26.4	6.2	18.8	長辺に刻銘
	⑥	北面	16.6	50.3	8.7	26.4	6.4	19.4	長辺に刻銘
	⑦	東面	16.5	50	8.7	26.4	5.9	17.9	長辺に刻銘
	⑧	南面	17	51.5	8.7	26.4	5.1	15.5	長辺に刻銘
下段	⑨	西面	18.5	56.1	4.5	13.6	6.8	20.6	
	⑩	北面	19.2	58.2	4.5	13.6	7.6	23	
	⑪	東面	19.3	58.5	4.5	13.6	7.2	21.8	
	⑫	南面	19.3	58.5	4.5	13.6	6.9	20.9	
計	12石								

⑨補修　先述のように、軸１の位置が造立当初と異なるが、花崗岩切石基壇を除く石材は、すべて造立当初のものである。

⑩石材　石塔部材・基礎・基壇の安山岩は、大別して以下の３種がある。

Ａ：角閃石安山岩

Ｂ：大粒の白色長石を含む安山岩

Ｃ：混入物のある安山岩

基壇上段より上はＡ、基壇中・下段はＢ・Ｃによるが、Ｃは基壇下段の１石のみである。Ａは常願寺川産の特徴的なもので、石材の多くを占める。Ｂ・Ｃの産出地は直近の常願寺川ともみられるが確定できていない。

(8) 造立目的とその背景

本石塔は、安政３年、石工中川甚右衛門本人が願主となって造立された。石工名はないが、全体構成や簡素ではあるが蓮弁等の細部の作りからみて、甚右衛門本人が製作も行ったと推定される。

基壇正面には、万霊の供養や無縁仏を供養する「三界万霊」の願意が示され、具体的には基壇北面に「先祖代々　為精帰菩提」とあることから、先祖供養の目的で造立されたものである。また、軸２には宝篋印陀羅尼経を意味する梵字シッチリヤを表記している。以上により、本石塔は、造立当初においては、宝篋印塔として造立されたといえる。基壇北面には４人の法名が記されているので、具体的にはこの４人の菩提を供養するために造立したものである。中川甚右衛門と法名ある４名との関係は不明であるが、４名ともに願主である甚右衛門の肉親者であろう。なお、法名は、男・女（出家者）・男・女の順になっており、２組の夫婦である可能性がある。比丘尼は一般に具足戒を受け出家した女性僧であるが、在家信者にも付与される。釈号者は浄土真宗等の信者であるが、甚右衛門本人あるいは中川家が浄土真宗信者なのか、現在の中川家檀那寺光厳寺の曹洞宗派なのかは不明である。

基壇裏面にある願主中川甚右衛門の銘には、「当村」とあることから、本石塔は当初馬瀬口村において造立されたとみられる。その後解体され、光厳寺墓地まで運ばれ組立てられ、中川家墓地として使用されるようになったという推移が復元される。旧地から光厳寺へ移動した年代は不明である。

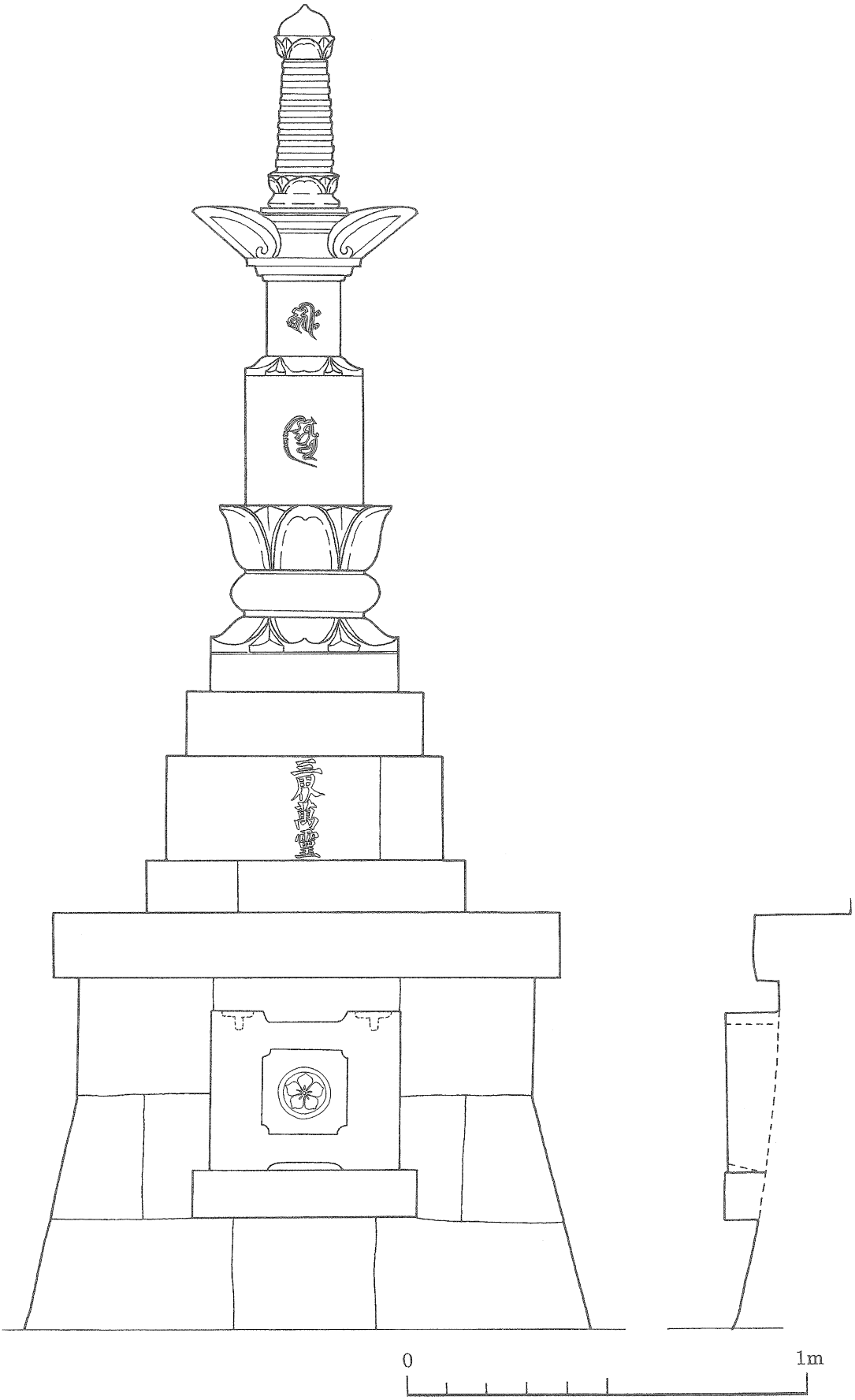
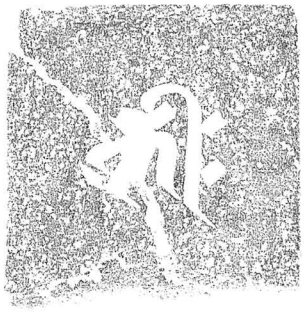


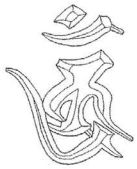
図１　光厳寺中川家宝篋印塔実測図



西面

阿弥陀如来

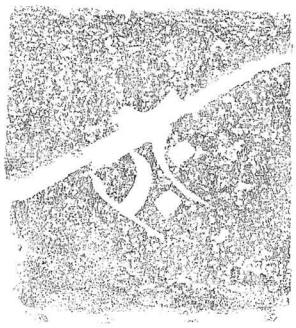
梵字　キリーク

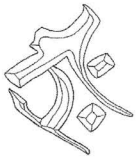


東面

阿閦如来

梵字　ウン

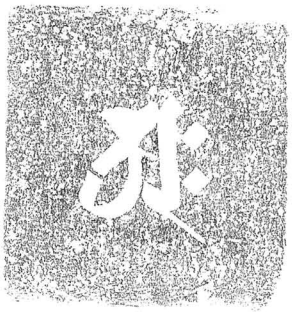




南面

宝生如来

梵字　タラーク



北面

不空成就如来

梵字　アク

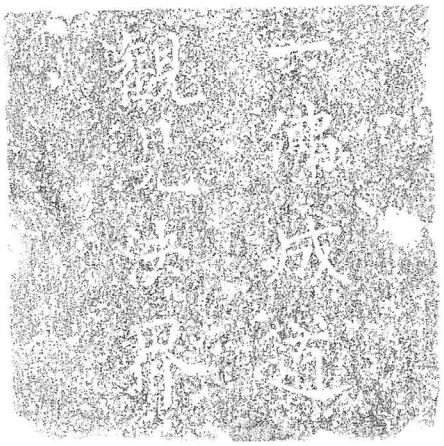
0　10cm

北面刻銘

草木國土

悉皆成佛

0　10cm



南面刻銘

一佛成道

觀見法界

0　10cm

図２　　軸１・軸２刻銘

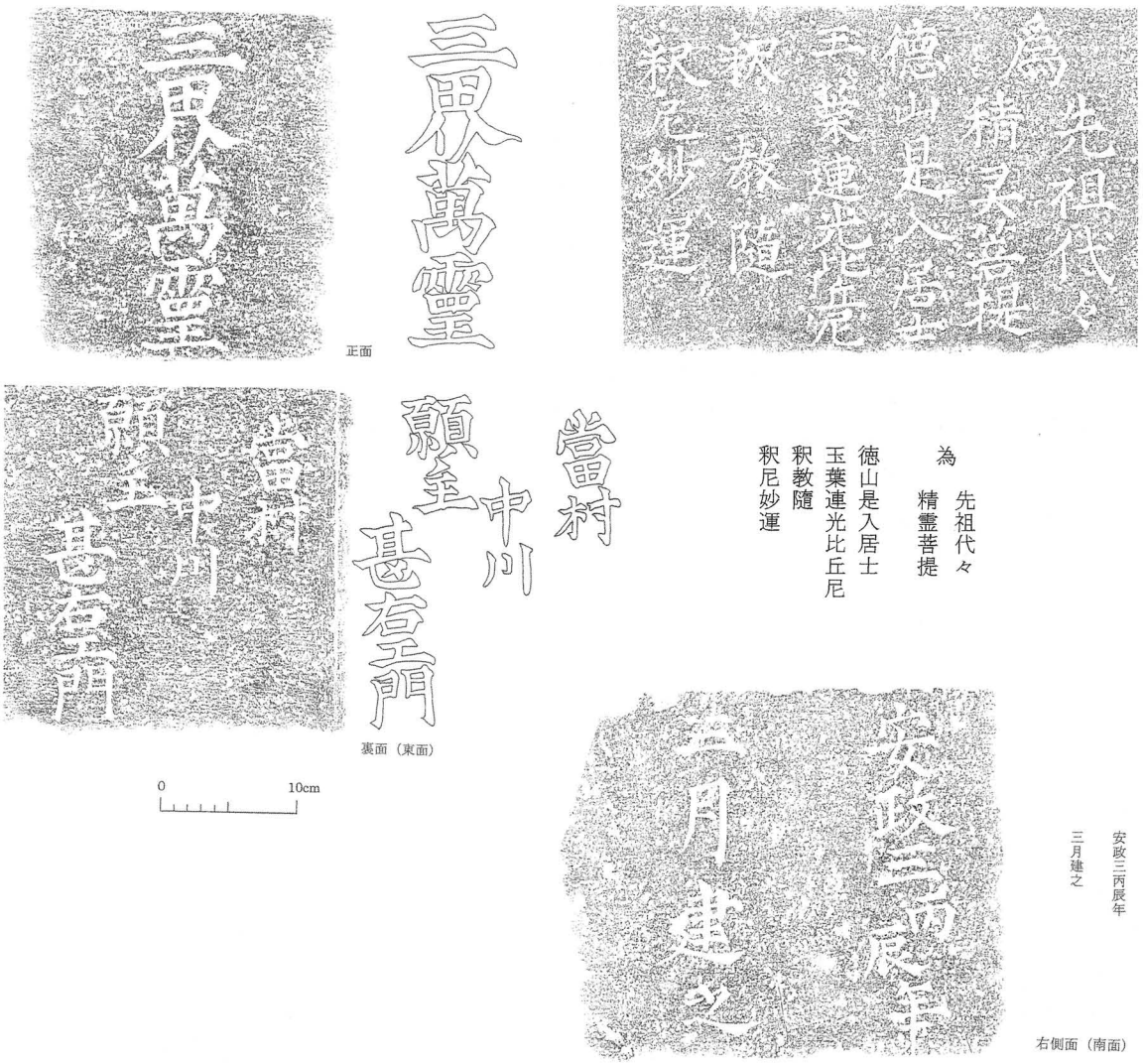


図３　基壇刻銘

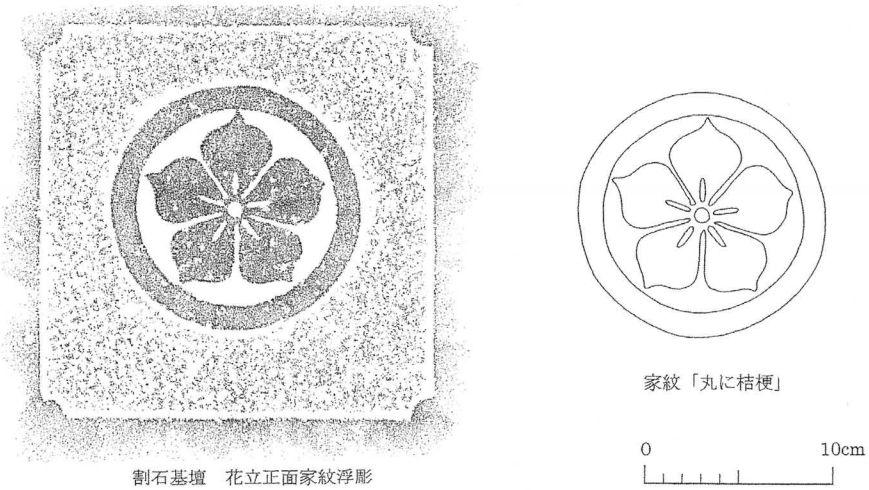


図４　花立浮彫家紋

写真１　光厳寺

写真３　宝珠近景

写真２　中川家墓地全景

写真４　相輪・軸１・笠

写真５　伏鉢

写真６　笠上面

写真７　隅飾突起

写真８　軸１西面　梵字キリーク

写真９　軸２西面　梵字シチリア

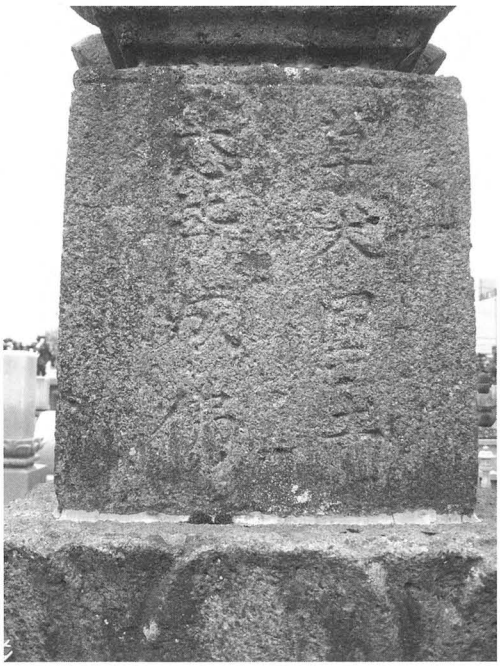


写真 10　軸２（南から）

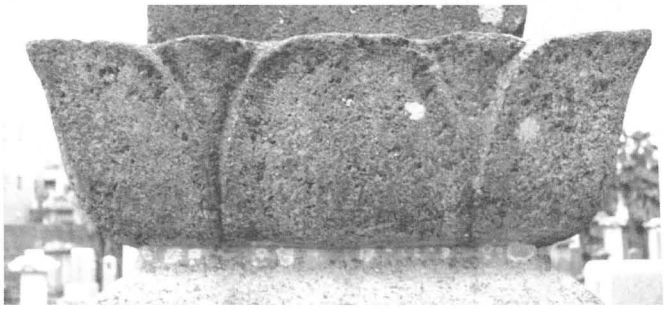


写真 11　請花

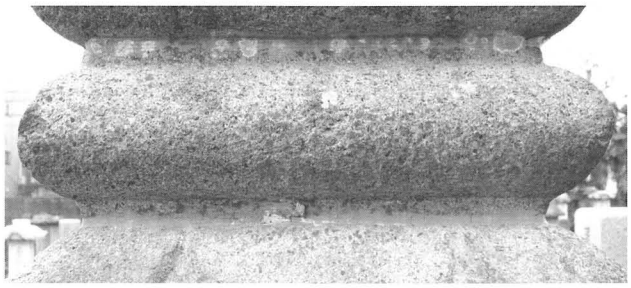


写真 12　饅頭形

写真 14　板石基壇

写真 15　板石基壇正面刻銘

写真 16　基壇（東面）銘文
願主　中川甚右衛門

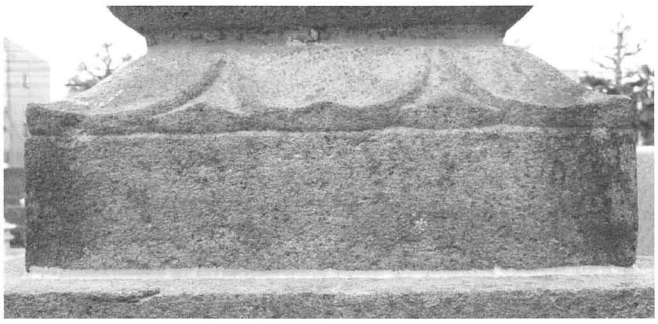


写真 13　基礎

写真 17　板石基壇北面刻銘（願文・法名）

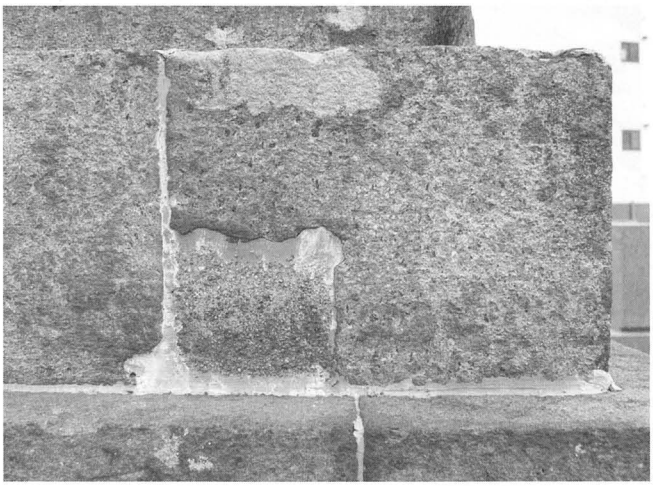


写真 18　板石基壇　埋められた礫石経投入口

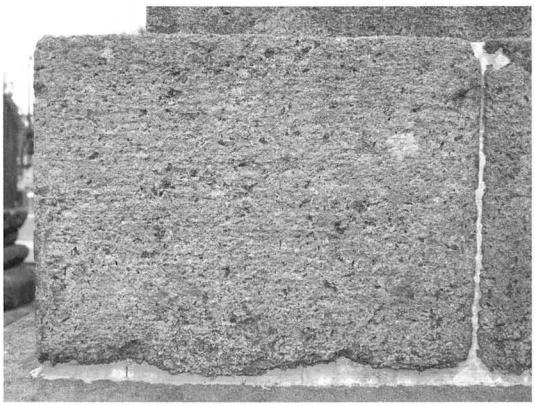


写真 19　板石基壇表面ビシャンタタキ整形

3　西番田辺家墓地宝篋印塔

(1) 調査の目的　　常願寺川石工製作の石造宝篋印塔の記録調査
(2) 調査日　　平成 23（2011）年 4 月 21 日～6 月 3 日
(3) 調査者　　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　　富山市西番共同墓地
(5) 種別　　宝篋印塔
(6) 年代　　嘉永 2（1849）年
(7) 調査概要

①宝篋印塔の所在状況

この石塔は、富山市西番共同墓地内に所在する。この墓地中央には庚申塚があり、高さ 1mの墳丘上に舟形の青面金剛石仏が置かれている。田辺家墓地はこの塚の 10mほど南に所在し、墓地全体の南寄りに位置する。

この石塔は『太田郷土史』に写真入りで紹介された〔中村監修 1987〕が、嘉永 2 年造立とあるだけで詳細は不明である。郷土史掲載写真と現在とを比較すると一致するが、基礎以下、特に割玉石基壇において石の隙間が大きい。したがって 1987 年以降修理が行われたことがわかる。

石塔は、新調された田辺家墓石に並んで建っており、宝篋印塔としての元来の存在意義が失われていないようである。正面は墓地入口側となる西面である。墓地は全体がコンクリートで補修されており、宝篋印塔が原位置をとどめているかは定かでない（写真 1）。

②全体構成　　本石塔は、安山岩製割玉石基壇とその上の石塔からなる（図 1・表 1）。基壇はコンクリート上に構築されており、近年改修されたものとみられる。割玉石基壇は高さ 65cm、本体高さは 250cm（8 尺 2 寸 5 分）、コンクリート面からの全体高 315cm である（写真 2）。

石塔の構成は、上から相輪、軸 1 、笠、塔身（5 段）、基礎、基壇（4 段）の 13 段構成である。この下の割玉石基壇は後補とみられる。

③相輪　　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢となる。これらは 1 石で造る。宝珠はややつぶれた半球形で、最大径は中位である。上部請花は主弁 4 弁・間弁 4 弁の 8 弁である。弁の縁はやや盛り上がり、先端は肥厚する。弁脈はない。九輪は上部請花から 5 c m離れて 1 輪目となる。1 輪目上端径 12.5cm、9 輪目下端径 15.5cm で下のほうの径が大きい。下部請花は 4 弁とし、弁上端を 5 葉にし、内側に花頭形に彫り窪め縁帯を設ける。縁帯の両端は渦巻とする。伏鉢は半円形である。下部請花が相輪の最大径となる（写真 3）。

④笠　　軒上 4 段、軒下 2 段である。隅飾突起は 49° の角度で外側へ広がり、

表1　田辺家墓地宝篋印塔の規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	相輪	17	51.5	7.5	22.7	角閃石安山岩	
笠	笠	7.3	22.1	17	51.5	角閃石安山岩	
塔身	軸1	6.7	20.3	6.2	18.8	凝灰岩？	四面に梵字種子
	反花	1.8	5.5	10	30.3	角閃石安山岩	
	軸2	10.2	30.9	10	30.3		正面に梵字シッチリア2面に刻銘
	請花	5.2	15.8	14.7	44.5	角閃石安山岩	
	饅頭形	3	9.1	11.2	34	角閃石安山岩	
基礎	反花	3	9.1	16.2	49.1	角閃石安山岩	
	基礎	4.5	13.6	16.2	49.1		
基壇	基壇1	5.2	15.8	22	66.7	安山岩（青系）	切石2石
	基壇2	7.4	22.4	25.65	77.7	安山岩（青系）	板石組
	基壇3	6.8	20.6	30.2	91.5	安山岩（青・赤系）	板石組
	基壇4	4.4	13.3	33.2	100.6	安山岩（青系）	板石組
計		82.5	250				

内側は弧状となる。隅飾突起内外面の文様は、輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となり、内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する（写真 3）。

⑤塔身　4 石 5 段で構成する。上から軸 1、反花、軸 2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸 2 を 1 石で造る。

A　軸 1　方形石の四面に月輪を浮彫し、その中央に薬研彫で陰刻した梵字種子を配する。月輪下は、5 葉の素弁＋2 葉の間弁と 2 弁の子葉からなる。4 つの梵字種子は、金剛界四仏を示す。本石塔では、北に阿閦如来、南に阿弥陀如来、西に不空成就如来、東に宝生如来が配置されている。元来形とは 90 度反時計回り（左回り）にずれた姿である。したがって、一度転落あるいは修理等の際に方向を誤って復元されたものと推定される（写真 4）。

B　反花　軸 2 と 1 石で造る。主弁が単弁 8 葉と間弁 8 葉の計 16 弁である。主弁の先端は厚く、尖って反る。間弁は厚く先端が尖り稜がある。

C　軸 2　方形石の 3 面に銘文を陰刻で彫る。正面となる西面には、中央に大きく梵字種子「シッチリヤ」を薬研彫で陰刻する。左面となる北面には「先祖代々霊」とあり、供養者を示す。霊は「霛」と表記する。右面となる南面には「嘉永二巳酉年／晩夏造塔之」とあり、造立が嘉永 2（1849）年であることを示す。巳は「己」と表記する。裏面に刻銘はない（写真 5・6）。

D　請花　1 石で造る。主弁が二重弁 8 葉＋間弁 8 葉の計 16 葉である。主弁の弁周縁は盛り上がり、弁先端は丸い。内側弁は厚く、先端が尖って大きく反る（写真 7）。軸 2 上の反花と同構成になる例が多いが、本例では異なる。

E　饅頭形　1 石で造る。平面形は四角形で、側面は楕円形である。表面に文様はない。

⑥基礎　2 段からなる。上部の反花とその下の方形石を 1 石で造る。反花は請花と同じ二重弁による構成である。基礎方形部には、4 面に文様を浮彫りする。4 面すべて波濤文であるが、各面の波形の構成は少しずつ異なる（写真 8）。

⑦基壇　板石 17 石を組み合わせ、4 段で構成する。各段の切石数と幅は次のとおり。

1 段目：2 石　横 2 尺 2 寸（66.7cm）、奥行 2 尺 1 寸 7 分 5 厘（69.5cm）、高さ 5 寸 2 分（15.8cm）

2 段目段：4 石　横 2 尺 5 寸 6 分 5 厘（77.7cm）、奥行 2 尺 5 寸 5 分（77.3cm）、高さ 7 寸 4 分（22.4cm）

3 段目：5 石　横 3 尺 2 分（91.5cm）、奥行奥行 2 尺 9 寸 9 分（90.6cm）、高さ 6 寸 8 分（20.6cm）

4 段目：6 石　横 3 尺 3 寸 2 分（100.6cm）、奥行 3 尺 3 寸 1 分 5 厘（100.4cm）、高さ 4 寸 4 分（13.4cm）

切石単体の長さは、最小 1 尺 3 寸 3 分（40.3cm）から最大 3 尺 2 分（91.5cm）である。表 2 に切石単体の規格一覧を示す。板石の積み方は、1 段目はほぼ同寸の 2 石を横置きする。2 段目は、ほぼ同じ規格の石材を、長辺の右端に小口面が見えるように置く。3

表2　基壇切石規格一覧

段数	部材番号	位置	長		高		厚		石材色調
			寸	cm	寸	cm	寸	cm	
1段目	①	西面	22	66.7	5.2	15.8	11.25	34.1	青色系
	②	東面	22	66.7	5.2	15.8	10.5	31.8	青色系
2段目	③	西面	20.25	61.4	7.4	22.4	5.2	15.8	青色系
	④	北面	20.4	61.8	7.4	22.4	3.7	11.2	青色系
	⑤	東面	21.7	65.8	7.4	22.4	5	15.2	青色系
	⑥	南面	20.5	62.1	7.4	22.4	5.4	16.4	青色系
3段目	⑦	西面	30.2	91.5	6.8	20.6	4.6	13.9	青色系
	⑧	北面	20	60.6	6.8	20.6	不明		青色系
	⑨	東面	13.3	40.3	6.8	20.6	5.3	16.1	青色系
	⑩	東面	16.5	50	6.8	20.6	6	18.2	青色系
	⑪	南面	19.3	58.5	6.8	20.6	不明		赤色系
4段目	⑫	西面	17.1	51.8	4.4	13.4	5.5	16.7	青色系
	⑬	西面	16.1	48.8	4.4	13.4	5.5	16.7	青色系
	⑭	北面	22	66.7	4.4	13.4	不明		青色系
	⑮	東面	15.1	45.8	4.4	13.4	5.6	17	青色系
	⑯	東面	18	54.5	4.4	13.4	5.4	16.4	青色系
	⑰	南面	22.25	67.4	4.4	13.4	不明		青色系
計	17石								

段目は正面は最長の１石を渡し、対面の東辺は２石を置く。南北は間を１石で埋める。4段目は正面・裏面は２石とし、南北辺は間を１石で埋める。

⑧割玉石基壇　下が広がる台形状である。安山岩玉石を四～六角形に割り乱積する。正面は13石を積む。各石の接合面はモルタルを充填する。

⑨補修　先述のように、軸１の方向が造立当初と異なることから、補修が確認できるほか、石材は全てモルタルにより接着固定されていることから、解体されている可能性がある。

⑩石材　石塔部材の安山岩は、大別して以下の２種がある。

Ａ：角閃石安山岩

Ｂ：大粒の白色長石を含む安山岩

基壇より上はＡ、基壇はＢである。基壇は、３段目の部材⑪のみ淡赤色の安山岩で、その他16石は全て青系安山岩である。

(8)造立目的とその背景

本石塔は、嘉永２年、田辺家先祖代々の供養を目的として造立された。田辺家についての資料はなく、詳細は不明である。

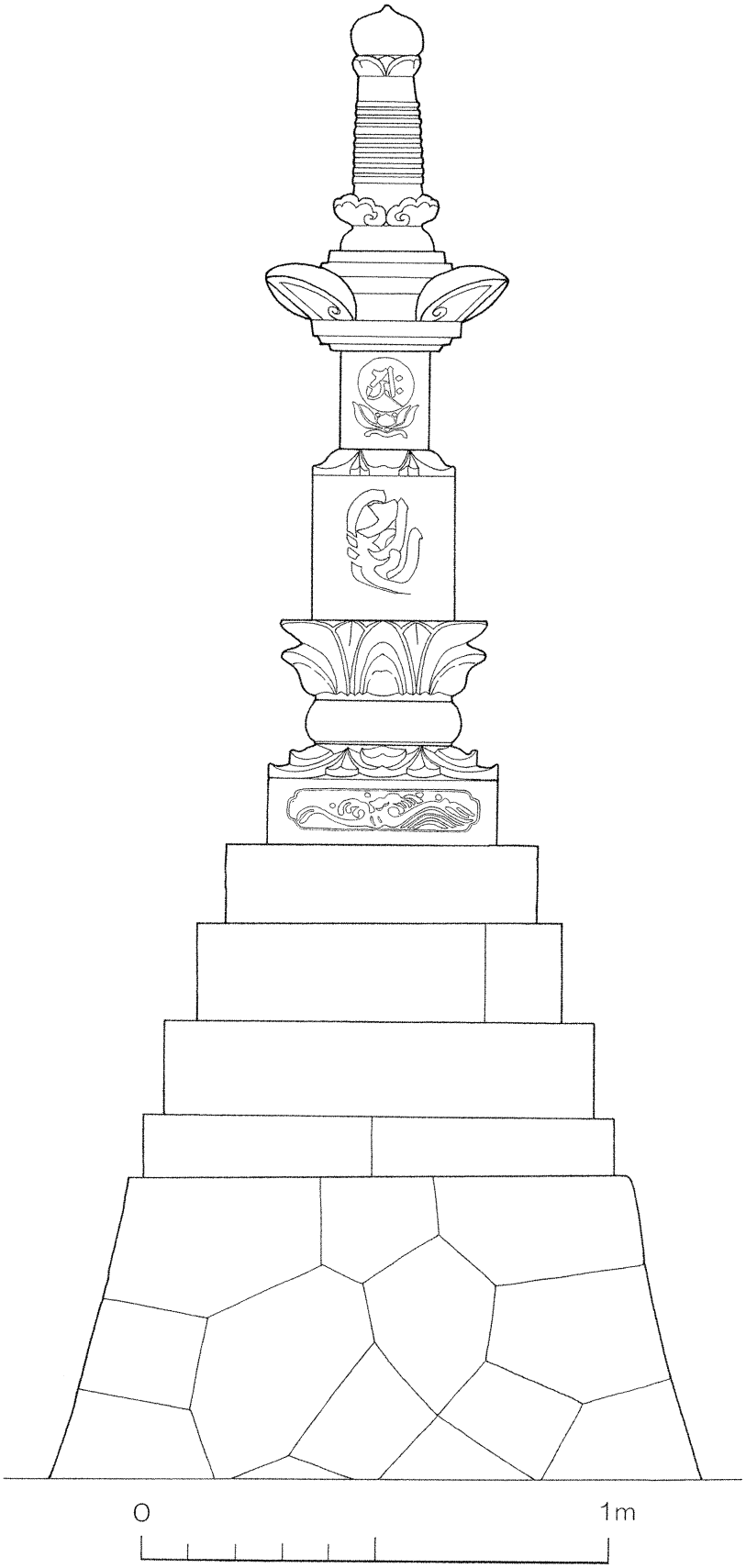


図１　田辺家宝篋印塔実測図

写真１　田辺家墓地全景（西から）

写真２　宝篋印塔全景（北西から）

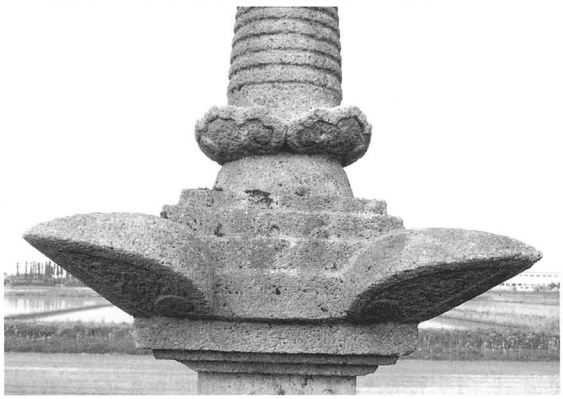


写真３　相輪・笠

写真４　軸１梵字

写真５　軸２梵字

写真６　軸２刻銘

写真７　請花

写真８　饅頭形・基礎

4　深谷山祇樹寺関係石造物

(1) 調査の目的　祇樹寺境内及び参道における常願寺川石工製作の石造物の記録調査

(2) 調査日　平成 23（2011）年 1 月 13 日～6 月 27 日

(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）・亀田正夫（富山市文化財調査審議会委員）

(4) 所在地　富山市八尾町深谷 1741

(5) 調査概要

①概要　曹洞宗深谷山祇樹寺（戸田光隆住職）は、応永 12（1405）年真言宗妙川寺が天岩宗越和尚により開かれ、永享 3（1432）年再興・曹洞宗への改宗、天正 6 年祇樹寺と改称し現在地に移転した。寛文 4（1664）年富山藩から寺地の寄進を受けた。

境内の中央奥に本堂があり、本堂前参道には、燈籠が一対置かれる。本堂東側は崖地になっており、その崖手前に北から、祠堂に入った三十三観音、一石一字納経塔、宝篋印塔が置かれている。また、門前の参道の途中に、参道左右の木造小堂に石仏 1 体ずつが安置されている。

②門前石仏　参道の向かって西側には地蔵菩薩、東側には十一面観音菩薩石仏が置かれている。

A　地蔵菩薩石仏（写真 1~5）　丸彫石仏で、左足を振り下げた地蔵坐像である。本体・饅頭形・基礎の 3 石で構成される。石材は 3 石とも常願寺川産角閃石安山岩である。

本体は高さ 23 寸(69.7cm)。左手は宝珠をもち、右手は錫杖をもつ形で円孔が空くが、鉄製錫杖は欠失する。蓮華座は 6 本の弁脈をもち、半立体的である。像容は、丸顔で、目は横一文字となる。鼻は三角形で鼻梁は高い。饅頭形は、円盤形で、高さ 4 寸（12.1cm）。正面には祥雲文を浮彫りする。基礎は、四角柱形で、高さ 14 寸（42.4cm）、幅 11.5 寸（34.9cm）、奥行 10.5 寸（31.8cm）である。上部は反花が彫出され、弁脈のない主弁 8 葉＋間弁 8 葉の計 16 葉からなる。

刻銘は、基礎の 4 面ともにみられる。正面の刻銘は「□樹龍華／中間大頭／四生六道／珠錫放毫」とある。地蔵菩薩の願文とみられる。右面は「維時文化五戊辰歳／伽羅陀山地蔵菩薩／四月八日点眼供養」とあり、文化 5（1808）年 4 月 8 日にこの地蔵菩薩石仏を開眼供養したことを表す。左面は「尊像半躰／成子寒念仏／神通□村中／寺中僧□者／同半躰／點眼供養料　願主現住俊英」とあり、成子村の寒念仏講、中神通村と西神通村の村民（檀家）、本寺僧が半分、第 25 世俊英が半分の開眼供養料を負担したことがわかる。裏面は「当山二十五世代□」とあり、第 25 世俊英住職が発願者となって石仏の奉納が行われたとみられる。

B十一面観音菩薩石仏（写真 8～13）　舟形石仏で、本体・蓮華座・饅頭形・六角形基礎 2 段の 5 石で構成される。石材は 5 石とも常願寺川産角閃石安山岩である。

本体は、高さ 23 寸(69.7cm)、幅 11.5 寸（34.9cm）で、舟形光背の先端が 5cm 程度欠けている。光背には立体的な祥雲文が彫られる。容姿は、端正な顔つきで、顎は丸く、目は閉じて、目尻はやや上がる。鼻梁は高く尖り、団子鼻となる。手足は大きく、指は角ばった表現となる。蓮華座は、径 12.5 寸（37.9cm）、高さ 5 寸（15.2cm）で、8 本の弁脈をもち、弁側端はやや幅広で盛り上がる。弁先端は大きく反る。主弁は 2 段×6 葉で、上段の主弁間に間弁 6 葉を表現し、計 18 葉となる。饅頭形は、最大径 10 寸（30.3cm）、高さ 4 寸（12.1cm）で、正面に波涛文を浮彫する。基礎 1 段目は、六角柱形で、高さ 11 寸（33.3cm）、一辺 6 寸（18.2cm）である。上部は反花が彫出され、弁脈をもつ主弁 6 葉＋間弁 6 葉の計 12 葉からなる。上の蓮華座の弁脈数より 2 葉少ない。正面には、中央に「三界万霊」の願文を彫る。願文の右には「為鶴林寿昌大姉」と供養者の法名、願文の左には「文政六未午四月吉日」と年月を記し、石仏を奉納して供養した日を記す。正面の両側の面は、同じモチー

フの蓮華文を浮彫する。裏側となる３面は整形を省略して、ノミ痕を残す。基礎 2 段目は、六角柱形で、高さ 5 寸（15.2cm）、一辺 7 寸（21.2cm）である。右面に「施主」、正面に「吉田作兵衛」、左面に「作者／馬瀬口村／中川／甚右衛門」と刻銘がある。これらの情報により、檀家と思われる吉田作兵衛が、鶴林寿昌大姉の供養のため、文政 6（1823）年馬瀬口村石工中川甚右衛門に十一面観音像を製作させて、当寺に奉納したものであることがわかる。

③境内燈籠（写真 14～17）　本堂前参道両側に一対の燈籠が置かれる。やや小型で、定型的な神前形燈籠である。

宝珠は、球形の先端が尖る。下半は丸みをもち無文である。屋根は四隅が肥厚するが軒反はない。火袋は日・月を透かし彫りし、2 段に掘った大きな方形火口を開け、その側面は日月を透かし彫りする。中台は、上の火袋受座は無文無断、下の請花は単弁で、主弁 8 葉＋間弁 8 葉の計 16 葉である。主弁の先端は肥厚し反る。間弁も厚く稜をもつ。竿は断面方形で、下が広がる撥形竿の形態であり、神前形燈籠である。竿側面に刻銘があり、「吉浦勾当昌明」「現住二十五世代」「享和二壬戌歳六月」とあり、享和 2（1802）年第 25 世俊英住職の代、寺の事務を執る役僧である勾当の吉浦昌明によって寄進されたことがわかる。基礎は、上半が反花となる。この反花は、中台の請花と同じ形態である。基礎下半は無文である。基礎の下には 2 段の基壇がある。以上の石材は安山岩及び常願寺川産角閃石安山岩である。

④一石一字納経塔（写真 18・19）　三十三観音石仏の南側に所在する。安永 5（1776）年 5 月造立の方柱円頭形の石塔である。方柱部先端は尖る。本体の側面の刻銘は、西面が「大乗妙典宝塔」でこれが正面である。南面「一石一字書写」、東面（裏面）「吉田八兵衛敬建」、北面「安永五丙申年五月吉日」とある。吉田八兵衛は願主である。文政 6 年門前十一面観音石仏を奉納した吉田作兵衛の先祖であろうか。

本体下には平面方形の請花がある。主弁は二重弁×8 葉＋間弁 8 弁の計 16 弁である。先端は反り、中央に稜をもつ。内側の蓮弁先端は肥厚し尖る。請花下には基礎がある。上半は緩やかな山形で、下半は方形である。文様はない。請花と基礎の間には石片が安定のため置かれており不自然である。元来は饅頭形 1 石があったと思われるが、欠失した。基礎の下には、台座状の切石があるが、コンクリートにほとんどが埋められているため、詳細は不明である。以上の石材は安山岩である。これらは割玉石積石基壇に埋まる。割玉石は神通川産安山岩 A〔古川 2010B〕でコンクリートで固めている。

⑤三十三観音石仏（写真 20～23）　境内の北東隅に置かれる。もとは露出していたが、近年堂内コンクリート上に固定・安置されたという。現状で第一番から第三十三番まで、番号の刻銘のある四角型台座の上に舟形石仏が安置される。これらは、西国三十三ヶ所観音霊場の札所本尊を刻んだもので、現状では番号と像容とが一致し、完全に揃っているものとみられる。ただし重複する像容が多く、製作当初の原形を留めているものかどうかは不明である。

「第一番」の基礎右面、及び「第三十三番」の基礎左面には、「文化五辰歳正月／四国三十三所観音／現住俊英代□」と 3 列に刻銘があり、この三十三観音石仏が、文化 5（1808）年に当寺 25 世の俊英住職により造立されたことがわかる。

なお、中央に丸彫地蔵立像が主尊のように安置されているが、これは三十三観音より年代が新しく、像容などから別石工による製作とみられる。

⑥宝篋印塔　一石一字納経塔の南側、本堂東側に置かれる。当初からこの位置に存在したのかは定かでない（写真 24）。

Ａ全体構成　石塔はコンクリート上に構築されており、近年改修されたものとみられる。コンクリ

ート面からの現存高は2.64mである（写真25）。

石塔の構成は、中世期標準形では、上から、相輪・笠・塔身・基礎・基壇の5段構成となるが、本例では相輪、笠、塔身部5段、基礎2段、基壇5段となり、計14段で構成する。相輪上部が欠損しており、これを復元した推定全体高は2.85m（9尺4寸）である（表1）。

表1　祇樹寺宝篋印塔の規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	相輪	11.95	36.2	6.7	19	角閃石安山岩	上部欠
笠	笠	8	24.2	16	48.5	角閃石安山岩	
塔身	軸1	7.1	21.6	6.6	20	角閃石安山岩	4面に梵字種子
	反花	1.85	5.6	9.9	30.1	角閃石安山岩	
	軸2	11.1	33.5	9.9	30.1		4面に銘文
	請花	5.45	16.5	13.85	42	角閃石安山岩	
	饅頭形	3.5	10.5	12.45	37.7	角閃石安山岩	
基礎	反花	2.3	7	14.7	44.6	角閃石安山岩	
	基礎	3.3	10.8	14.7	44.6		文様なし
基壇	基壇1	6	18.2	18.9	57.3	安山岩	板石。3面に銘文
	基壇2	6.8	20.6	24.2	73.3	安山岩	板石。3面に銘文
	基壇3	6.9	20.9	28.2	85.4	安山岩	板石。4面に銘文
	基壇4	6.5	19.7	34	103	安山岩	板石。3面に銘文
	基壇5	6	18.2	39	118.2	安山岩	
計	現高	86.75	263.5				

B相輪（写真 26～28）

上部の宝珠・上部請花・九輪のうち上1輪までが欠損する。九輪のうち下部8輪・下部請花・伏鉢が残存するが、上から7輪目と8輪目の間で折れており、針金を巻いて固定している。これらは1石で造る。角閃石安山岩製。残存長35.8cmである。九輪は2輪目径9.6cm、9輪目径12.4cmで下のほうの径が大きい。下部請花は4弁で、横長である。弁の形状は花頭形で、弁の縁辺は細く隆起した縁取りとしている。弁脈はない。伏鉢は緩やかな半球形で、径19cmである。全体の最大径は伏鉢下端である。

C笠　笠は軒上5段、軒下2段である。隅飾突起は約53°の角度で外側へ広がり、内側は単純な弧状となる。突起内の文様は、輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となり、内部は無文で平滑加工する（写真29・30）。

D塔身　4石5段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸2を1石で造る。

a　軸1　縦21.6cm×横20.1cm(7寸1分×6寸6分)の方形石で、四面に金剛界四仏の梵字種子を浮彫月輪内に薬研彫で陰刻する。月輪下の文様は、正面となる西側は蓮弁、その他は祥雲文である。祥雲文は、南面は2段、東面は1段で右方にのみ雲尾が伸びる。北面は中央に大きな渦巻があり雲尾は左方にのみ伸びる等多様である（写真31）。

b　反花　主弁が単弁8葉の主弁＋単弁8葉の間弁の計16葉で構成する。弁の周縁は幅広にやや盛り上がり、先端は尖る。

c　軸2　縦33.5cm（1尺1寸）×横30.3cm(1尺)の方形石で、上端1cmほどは笠下端の掘り込みに収まる。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫られる。西面は中央に「寶篋印塔」とある。他の文字に比べ大きな文字となっており、石塔の目的を示している。

北面は、10字×6行の漢文で、「巍巍宝塔其徳豈可量哉／確乎其願始於先師不肖／英雖稟師之命経歳月既／八年今夏立塔書写大乗／妙典以納諸塔中則師之／志願于茲円成者歟所集」とある。この意味は、宝塔造立の発願は先代住職が行ったが、死去後8年を経て今年の夏に造立し、書写した大乗経典を塔に納め、先代の遺志を果たしたというものである。南面は、5文字×4行の漢文で、「塔様巍巍処／金剛正体円／如来真秘密／功徳利人天」とある。東面は、6行にわたる銘文である。右端から4行34文字は、「殊勲供養三世如来十方／薩□四生六□一切群類／仰□見聞髄喜出離生死／悉証菩

提」とあり、経文あるいは願文とみられるが、引用先は不明である。大蔵経ではない。その後には「時文化二乙丑年四月大功徳日」と続き、本石塔が文化 2（1805）年 4 月に造立されたことを記す。末尾には「現住俊英謹誌」とあり、造立時における祇樹寺住職は俊英和尚であり、軸 2 の銘文の作成者が俊英和尚であることもわかる。俊英和尚は境内所在の三十三観音石仏及び門前の地蔵菩薩・十一面観音菩薩石仏の造立も行っており、25 世住職であったことが判明している。謹誌とあることから、軸 2 各面の銘文書体は、俊英和尚の揮毫に基づくものであることがわかる（**写真 32～34**）。

d　請花　主弁が単弁 8 葉の二重弁形式で、主弁間に単弁 8 葉の間弁を置き、計 24 葉で構成する。内側の弁は、丸みを持ち、先端が肥厚し尖って反る。外側の弁は平坦で、先端中央には稜がある（**写真 35**）。

E　饅頭形　1 石で造る。高さ 10.5cm（3.5 寸）、幅 37.7cm 角（1 尺 2 寸 4 分 5 厘）で、楕円形に彫下げた内側に文様を陽刻する。文様は次のとおりである。

西面（正面）：中央に龍、右側周縁に祥雲文

北面：中央に四足動物（兎か？、振り返る姿）、背景は波濤文

東面：波濤文

南面：中央に四足動物（兎か？、頭を下にし振り返る姿）、背景は波濤文

正面には龍を配置しており、龍が重要な役割を示している。左右面となる北面・南面は、兎とみられる動物を配する類似したモチーフであるが、動物の表現が少し異なる（**写真 35・36**）。

e　基礎　2 段からなる。最上部の反花とその下の方形石は 1 石で造る。側面は高さ 10.8cm（3 寸 3 分）、横幅 44.6cm（1 尺 4 寸 7 分）刻銘はない。反花は、主弁が二重弁の 8 葉形式で、主弁間に単弁 8 葉の間弁を置き、計 16 葉で構成する。外側の弁は、丸みを持ち、先端が肥厚し尖って反る。内側の弁は先端が尖って反る。請花の弁型式と共通している。石材は、基礎を含めこれより上は、すべて角閃石安山岩である（**写真 35**）。

f　基壇　基礎の下には切石 22 石を組み合わせた基壇 5 段があり、このうち上から 4 段には銘文を陰刻する。各段の切石数・幅・高さ等は、表 2 のとおりである。切石単体の長さは、最小 35.5cm(1 尺 1 寸 7 分)から最大 80.3cm（2 尺 6 寸 5 分）で、平均値は 60.3cm（1 尺 9 寸 3 分）である。幅の平均値は 19.3cm（6 寸分）、厚さの平均値は 20.7cm（6 寸分）である。

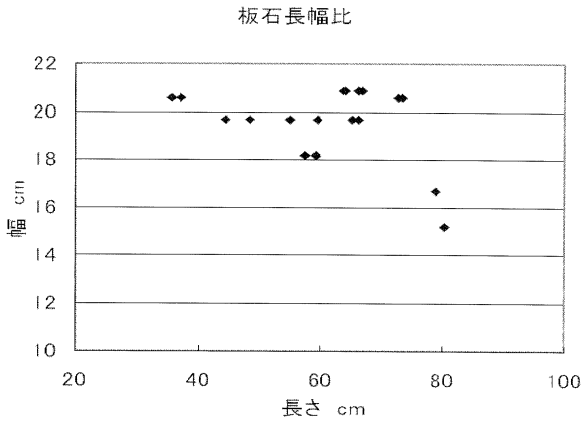
表 3 に切石単体の規格を示す。

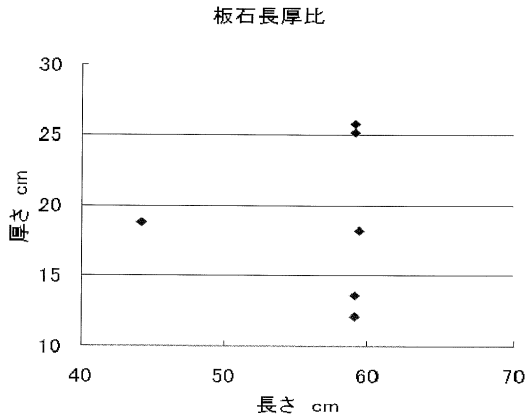
表2　祇樹寺宝篋印塔

段数	切石数	横幅		奥行		高		部材番号
		寸	cm	寸	cm	寸	cm	
1段目	2	18.9	57.3	19.1	57.9	6	18.2	1･2
2段目	4	24.2	73.3	24.1	73	6.8	20.6	3～6
3段目	4	28.2	85.4	28.5	86.4	6.9	20.9	7～10
4段目	6	34	103	34	103	6.5	19.7	11～16
5段目	6	39	118.2	39.1	118.5	6	18.2	17～22
計	22							

表3　基壇板石属性表

段	部材番号	長軸位置	横幅		高		厚		銘
			cm	尺	cm	尺	cm	尺	
1段目	石材1	西	57.3	18.9	18.2	6	28.8	9.5	小口両面に銘
	石材2	東	57.3	18.9	18.2	6	29.1	9.6	3面に銘
2段目	石材3	西	73.3	24.2	20.6	6.8	18.2	6	小口両面に銘
	石材4	北	37	12.2	20.6	6.8			銘
	石材5	東	72.7	24	20.6	6.8	19.1	6.3	3面に銘
	石材6	南	35.5	11.7	20.6	6.8			銘
3段目	石材7	西	63.6	21	20.9	6.9	19.7	6.5	大面に銘
	石材8	北	66.1	21.8	20.9	6.9	21.8	7.2	小口に銘
	石材9	東	64	21.1	20.9	6.9	19.7	6.5	2面に銘
	石材10	南	66.7	22	20.9	6.9	22.7	7.5	2面に銘
4段目	石材11	西	54.8	18.1	19.7	6.5	18.2	6	小口に銘
	石材12	西	48.2	15.9	19.7	6.5	19.7	6.5	小口に銘
	石材13	北	65.1	21.5	19.7	6.5			大面に銘
	石材14	東	59.4	19.6	19.7	6.5	18.2	6	2面に銘
	石材15	東	44.2	14.6	19.7	6.5	18.8	6.2	2面に銘
	石材16	南	66.1	21.8	19.7	6.5			
5段目	石材17	西	80.3	26.5	15.2	5			
	石材18	北	59.1	19.5	18.2	6	25.8	8.5	
	石材19	北	59.1	19.5	18.2	6	13.6	4.5	
	石材20	東	78.8	26	16.7	5.5			
	石材21	南	59.1	19.5	18.2	6	25.2	8.3	
	石材22	南	59.1	19.5	18.2	6	12.1	4	





板石の積み方は、1段目は2石で、西面（正面）と東面に2石を置く（部材①②）。2段目は、西面（正面）と東面に 2 石を渡し（部材③⑤）、南北面は横幅が短い1石を詰めており（部材④⑥）、正面の見栄えを優先した積み方である。3段目はほぼ同寸の4石を組む。石材の小口面は向かって左側に見える。4段目は、西面（正面）と東面に2石、北面・南面はその小口面の間に1石を入れる。5段目は、4段目とは逆に、北面・南面に2石を置き、西面と東面は、その小口面間に1石を入れる。5段目の高さは6寸であるが、下がコンクリートに埋まっているため、正確な情報は不明である。板石の表面はビシャン叩きにより平滑に仕上げている。石材はすべて安山岩で、青色が主である。中に淡赤色のものが含まれる。

刻銘は上から4段に認められる。5段目にはない。正面となる西面は、3段目に刻銘はあるが、1・2・4 段目にはない。その他の3面には刻銘が存在するが、3 段目の部材⑧北面・部材⑦南面には認められない。銘の内容は、僧名及び法名で、1行が1名である。1段目は各面10名で計30名、2段目は各面12名で計36名、3段目は北面3名＋東面14名＋南面11名+西面13名で計41名、4段目は北面19名＋東面22名＋南面18名で計59名であり、総計166名となる。4段目南面最末尾は「三界万霊」で括られている。以下に銘文を示す。□は解読不能である。以下の人々は、この石塔の造立に関わった人々と考えられる（**写真37～41**）。

和尚は、俊英住職の関係者、首座・上座・比丘尼は、本寺で得度した僧あるいは有力信徒、一般信徒は石塔造立の経済的支援者とみられる。ただし信徒はすべて法名であることから、①経済的支援者である供養主が、菩提を弔う目的で亡くなった家族等の法名を記載した、あるいは②生存する信徒が生前に法名を取得し記載した、等複数の理解が可能で、今後過去帳等による調査が必要である。

g　修理痕　　相輪上部が欠損しているほかは、遺存状況は良好である。石塔の基壇下はコンクリート基礎となっており、石塔各部材は樹脂によりシールされており、近年において解体修理が行われたとみられる。詳細な記録は見当たらない。この解体修理にあたり、ほとんどの部材は元のとおりに復元されたと見られるが、全体的に異質な部分が存在する。

刻銘のある基壇4段において、正面となる西面には、そのうち3段目を除いて刻銘が存在しない。これは正面を意識した所作と見られるが、3段目にのみ刻銘があり異質である。先に述べたように3段目の他の面において、部材⑧の北面及び部材⑦の南面には刻銘がない。このことから、正面である西面に刻銘を刻まないという統一性を考慮すると、3段目の部材4石が原状に復されなかった可能性を考えることができる。西面に刻銘のない面を揃えるとすると、部材⑦と⑧の入れ替え、部材⑨と⑩の入れ替えを行えば、西面に刻銘のない面が揃うことになる。ただし、無銘の面が正面となるか、あるいは裏面（東面）となるかについては、本刻銘における順序等や他所の宝篋印塔における刻銘例の

検討を行った上で今後検討を行うこととする。

(6) 宝篋印塔造立の経緯について

祇樹寺宝篋印塔は、文化2年4月に25世俊英住職が願主となって造立されたものである。軸2北面の銘文では、この造立は、先代住職が8年前の寛政9（1797）年に発願したものという。

住職が発願して宝篋印塔の造立を行った寺院には、真言宗五穀山龍高寺（寛政9年）、真言宗北叡山各願寺（享和4（1804）年）がある。龍高寺では本堂再建記念、各願寺では先代住職の三十三回忌の際であり、寺院にとって大きな行事が発生することが契機となって造立されている。

このことから、寛政9年あるいは文化2年のいずれかにおいて、本寺における大きな記念碑的行事が予定されていたものと考えることができる。その内容については、寺史あるいは過去帳等からの解析により推定されるものであろう。

(7) 基壇刻銘について

本石塔の基壇にみえる銘文の内容は、僧籍者名と信徒法名である。その区分及び人数は表4のとおりである。

僧籍者には、和尚・首座・上座・比丘尼がある。和尚は、住職あるいはそれ以上の高僧で、3人の名がある。先代住職あるいは先住・現住の指導者等とみられる。過去帳等による確認が必要である。首座は、修行僧のリーダーで、六頭首の第一位。この役職を務めることにより住職資格を得ることができる。2人がおり、先住または現住が指導者である可能性がある。上座は、出家得度しながら立身しない法階の者のことで、11人がいる。比丘尼は、出家得度した尼僧で、11人がいる。上座・比丘尼は、出家僧であるが、同数であり、夫婦関係をもつ信徒の可能性も否定できない。本石塔造立に関わって、あるいは本寺維持における有力な財政的支援者であって、形式的には出家者であるが在家信徒として、財政的支援に伴い上位の僧号が与えられた可能性もある。その正否の判断は過去帳等による在俗状況の確認が必要であろう。庵主は、一般的には尼僧であるが、死去後仏門に入ったこととして扱われる位号としても存在

表4　祇樹寺宝篋印塔刻銘にみる法名等の区分

区分	名称	人数	割合(%)	備考
僧籍者	和尚	3	1.9	1段目
出家信徒	首座	2	1.2	1段目
	上座	11	6.8	1・2・4段目、1段目主
	比丘尼	11	6.8	1・2段目
一般信徒	庵主	1	0.6	2段目
	居士	28	17.2	1～4段目
	大姉	23	14.2	1～4段目
	信士	31	19.1	2～4段目、3・4段目主
	信女	23	14.2	2～4段目、4段目主
	禅女	1	0.6	2段目
子供	禅童子	1	0.6	3段目
	童子	11	6.8	2～4段目、4段目主
	童女	15	9.3	2～4段目、4段目主
	孩女	1	0.6	3段目
小計		162		
他宗派	釈	4	2.4	2～4段目
計		166		

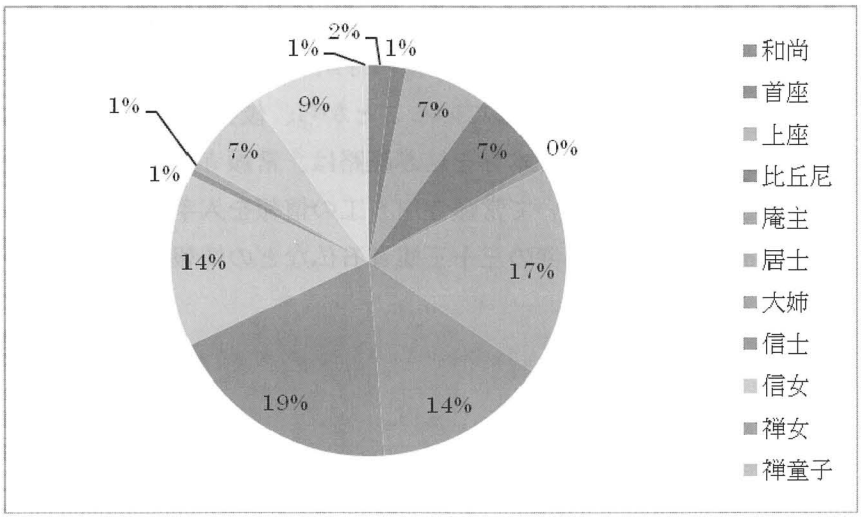


図2　法名等の割合

する。本例の場合は、比丘尼と別格に扱われており、後者と理解されよう。

居士・大姉、信士・信女、童子・童女は、一般的信徒である。居士・大姉は計 27%、信士・信女は計 33%であり、後者が多い（図 2）。釈号者 5 名は、すべて女性で釈尼となっている。信徒の妻・家族等の立場として縁故者と見なされ記載されたものとみられる。

当寺の宝篋印塔には、本寺住職及びその関係者、信徒法名など、具体的な関係者名が多数確認できた。これらの人々は、供養主（願主）であるか、あるいは被供養者（死去者）であるかは不明である。過去帳や信徒墓地等の情報を確認し、造立年との対比等をへて決定する必要があるといえる。

また 25 世俊英住職に関わる情報も不足している。これらも寺史や過去帳の内容を分析することにより、石塔造立の要因等を解明することに繋がると考えられる。

(8) 石仏の奉納について

祇樹寺門前・境内に所在する石造物は、すべて本寺 25 世俊英代に設置されたものである。このうち、門前の文政 6 年作十一面観音石仏を除く石造物は、いずれも享和 2 年から文化 5 年までの 7 年間に、俊英住職の発願により製作・設置・奉納されたものである。このことから、この期間に祇樹寺の整備関係に大きな画期があったことが推定される。

また、曹洞宗における寺院整備の側面からみて、燈籠・宝篋印塔の存在については通例として認められるが、観音信仰に基づく三十三観音石仏の設置は本来密教系寺院であり、また、門前地蔵菩薩石仏に見える寒念仏講も一般に真宗系における組織が多い。このように関係石造物には他宗派の影響が色濃く認められる。本寺は富山県上市町の曹洞宗眼目山立山寺の末寺であるが、立山寺栂並木参道には類似した三十三観音石仏が置かれており、興味深い。なお本寺は、富山の呉東地区の寺院で構成された「新西国観音三十三札所」の一つであるが、この写し霊場の開設は昭和 8 年と新しい。俊英住職におけるこのような超宗派的活動は、他宗派檀家との接触の工夫の一つ、あるいは宗派を超えた思考により、信徒獲得等を図ったものであろうか。あるいは有力檀家（門前十一面観音奉納の吉田氏など）における宗教的意図が介在したものであろうか。俊英住職の本寺における活動の解明が待たれる。

以上のように、本寺における石造物の内容は、江戸後期 19 世紀初頭における本寺整備の画期、及び 25 世俊英住職の超宗派的活動について解明する糸口となる。特に、未解読である宝篋印塔の供養者法名等の解読、あるいは過去帳等との照合により、檀家とのつながりや造立契機を解明することが可能となり、今後この方面の調査が必要となると思われる。

また、これらの石造物はすべて常願寺川石工製品である。常願寺川石工と当寺とのつながりは、享和 2 年以降俊英代に発生していることから、俊英住職と常願寺川石工との関係性において理解するべきであろう。立山寺と本寺を結ぶ経路は、常願寺川石工の本居地を横断して行くことになるため、立山寺との行き来において常願寺川石工の情報を入手できた、あるいは年代は不明ながら常願寺川石工作と推定される立山寺の三十三観音石仏などの情報から、常願寺川石工との関係が発生したと推測される。

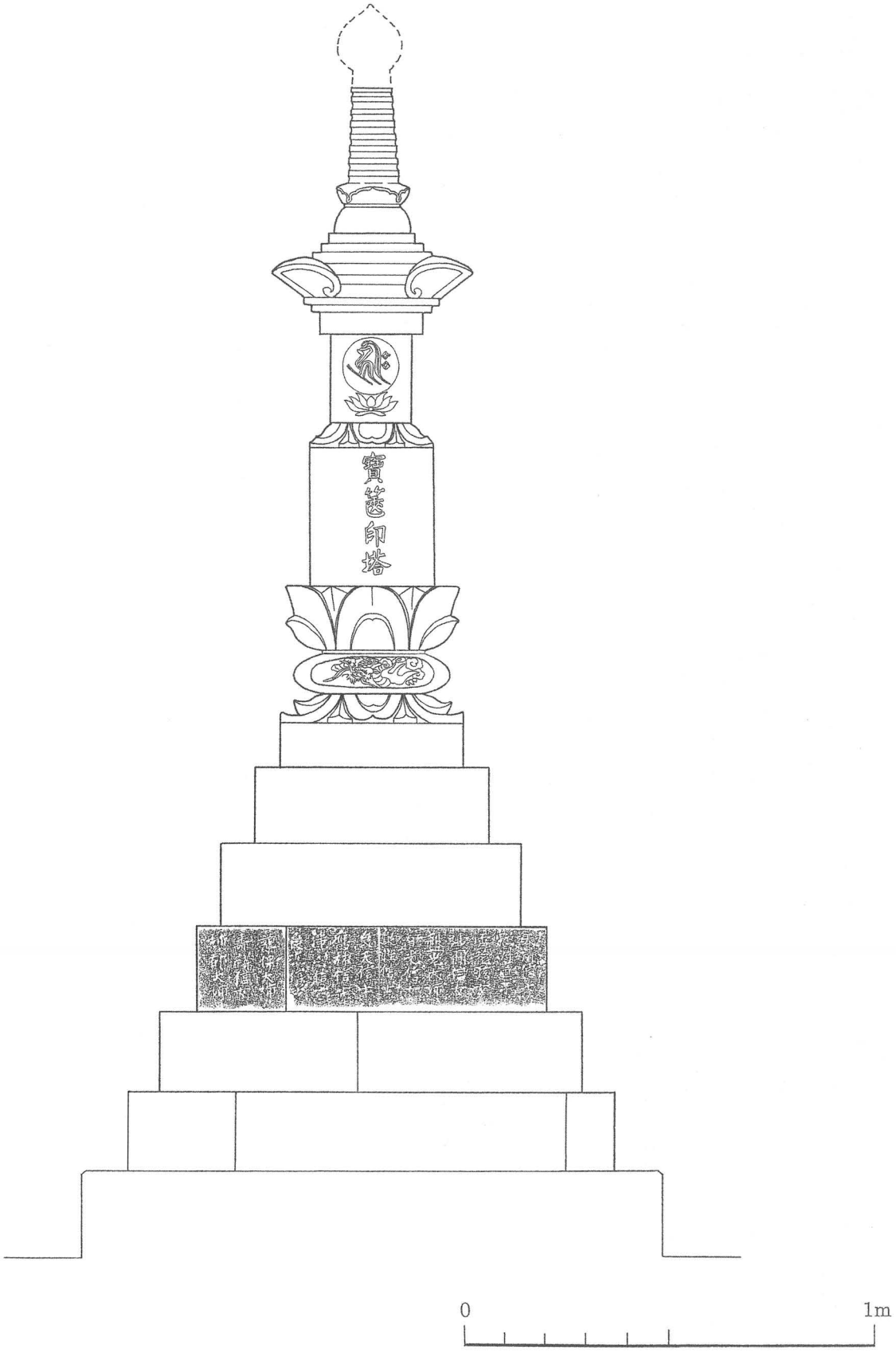
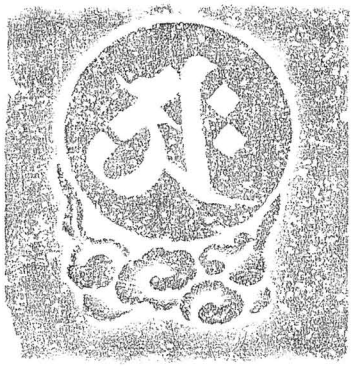
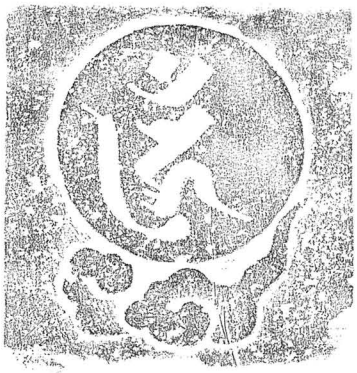


図１　祇樹寺宝篋印塔実測図

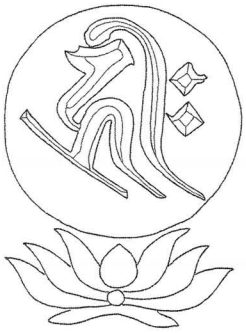


北面
アク（不空成就如来）



東面
ウーン（阿閦如来）

南面
タラーク（宝生如来）



西面（正面）実測図

西面（正面）
キリーク（阿弥陀如来）

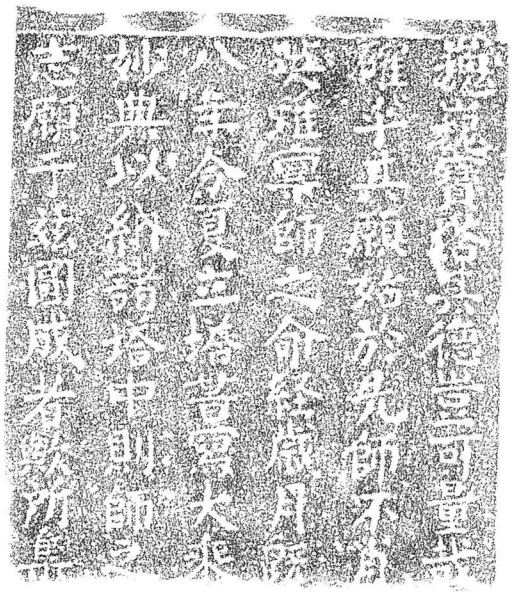
0　10cm

図２　軸１　梵字種子刻銘

宝篋印塔

西面（正面）刻銘

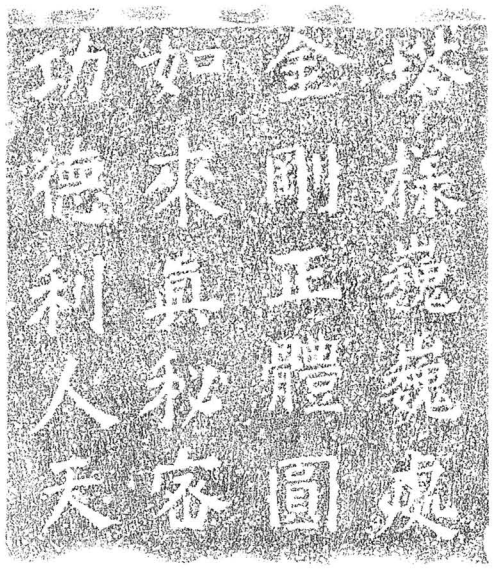
0　10cm



巍巍宝塔其徳豈可量哉
確乎其願始於先師不肖
英雖稟師之命経歳月既
八年今夏立塔書写大乗
妙典以納諸塔中則師之
志願于茲円成者歟所集

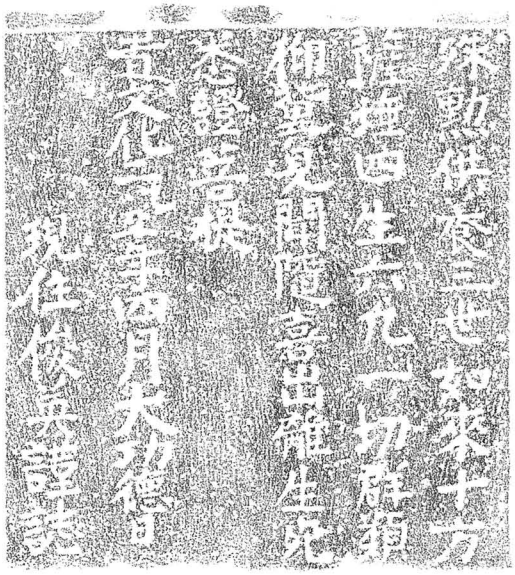
北面刻銘

図３　軸２刻銘



塔様巍巍処
金剛正体円
如来真秘密
功徳利人天

南面刻銘

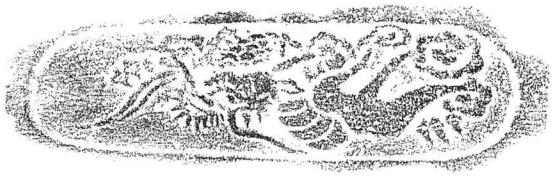


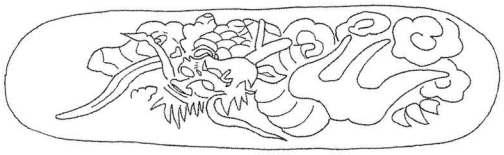
殊勲供養三世如来十方
薩□四生六□一切群類
仰□見聞髓喜出離生死
悉証菩提
時文化二乙丑年四月大功徳日
現住俊英謹誌

東面刻銘

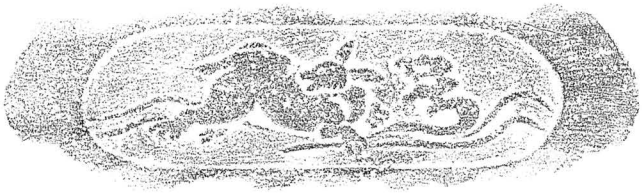
0　10cm

図 4　軸 2 刻銘

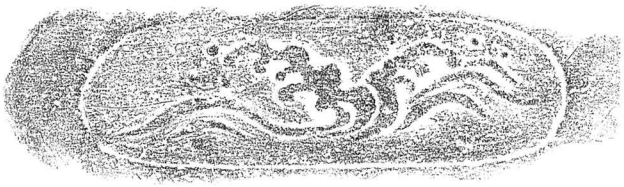




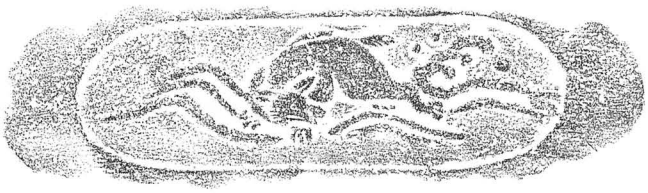
西面（正面）
龍・祥雲文



北面
四足動物（兎？）・波濤文



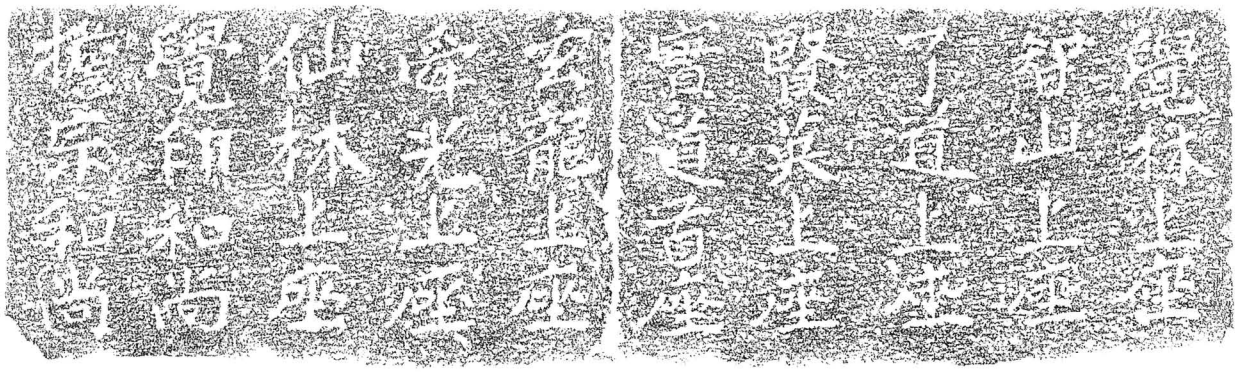
東面
波濤文



南面
四足動物（兎？）・波濤文

0　10cm

図 5　饅頭形浮彫文様



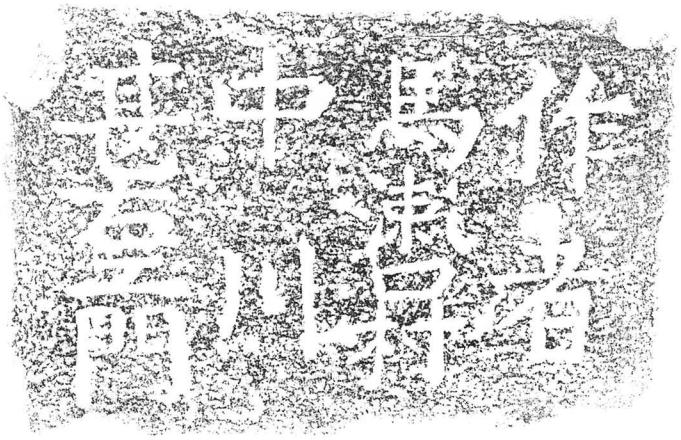
【基壇一段目・南面】

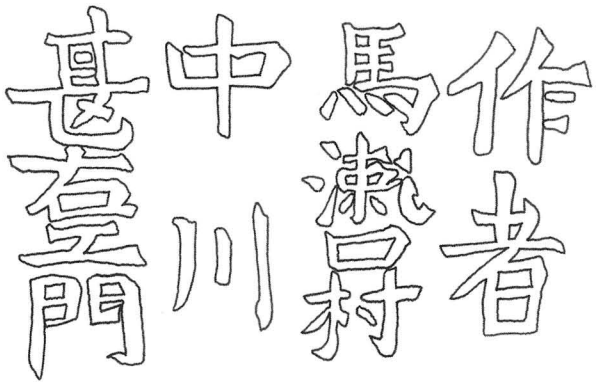
覚林上座
智山上座
了道上座
賢英上座
実道首座

玄龍上座
舜光上座
仙林上座
覚印和尚
宗和尚

0　10cm

図 6　基壇刻銘





0　10cm

図 7　門前石仏刻銘

写真1　門前文化5年作地蔵菩薩石仏

写真2　地蔵菩薩の顔

写真3　蓮華座部・饅頭形

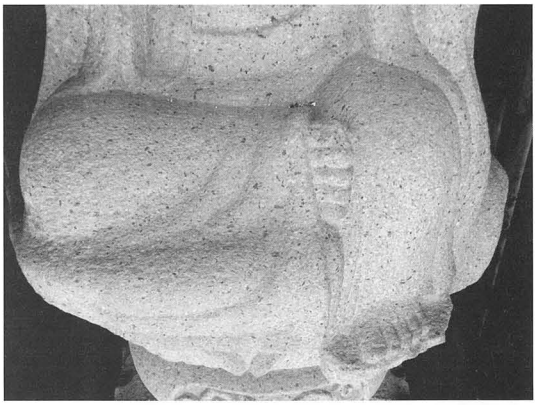


写真4　振下げ足の表現

写真5　台座上部反花

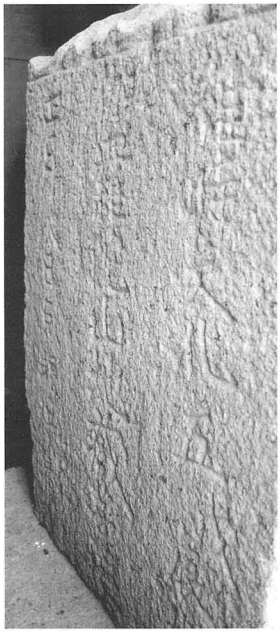


写真6　台座左面刻銘

写真7　台座右面刻銘

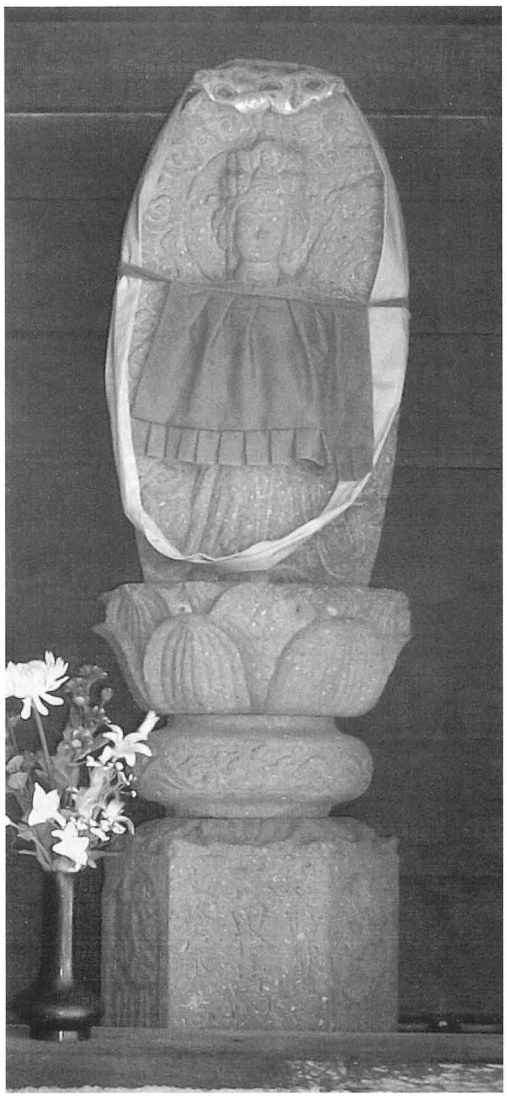


写真8　門前文政6年十一面観音菩薩石仏

写真9　光背祥雲文

写真10　蓮華座・饅頭形

写真11　台座正面願文

写真12　台座浮彫（左面）

写真13　台座2段目左面刻銘（石工名）

写真 14　本堂前燈籠の配置

写真 15　燈籠

写真 16　燈籠竿部刻銘
「享和二年」

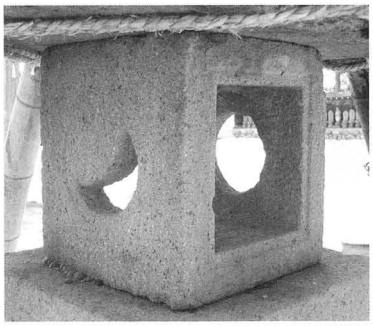


写真 17　燈籠火袋

写真 19　一石一字納
経塔本体左面刻銘

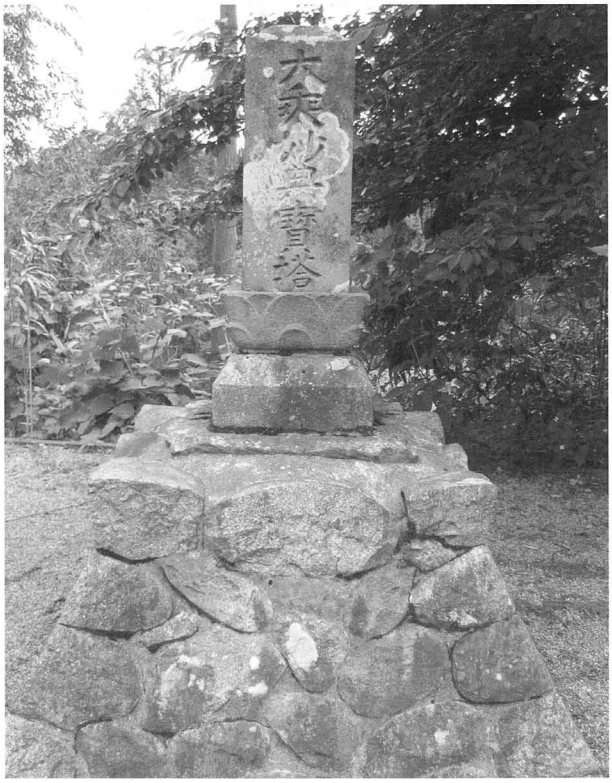


写真 18　一石一字納経塔（西から）

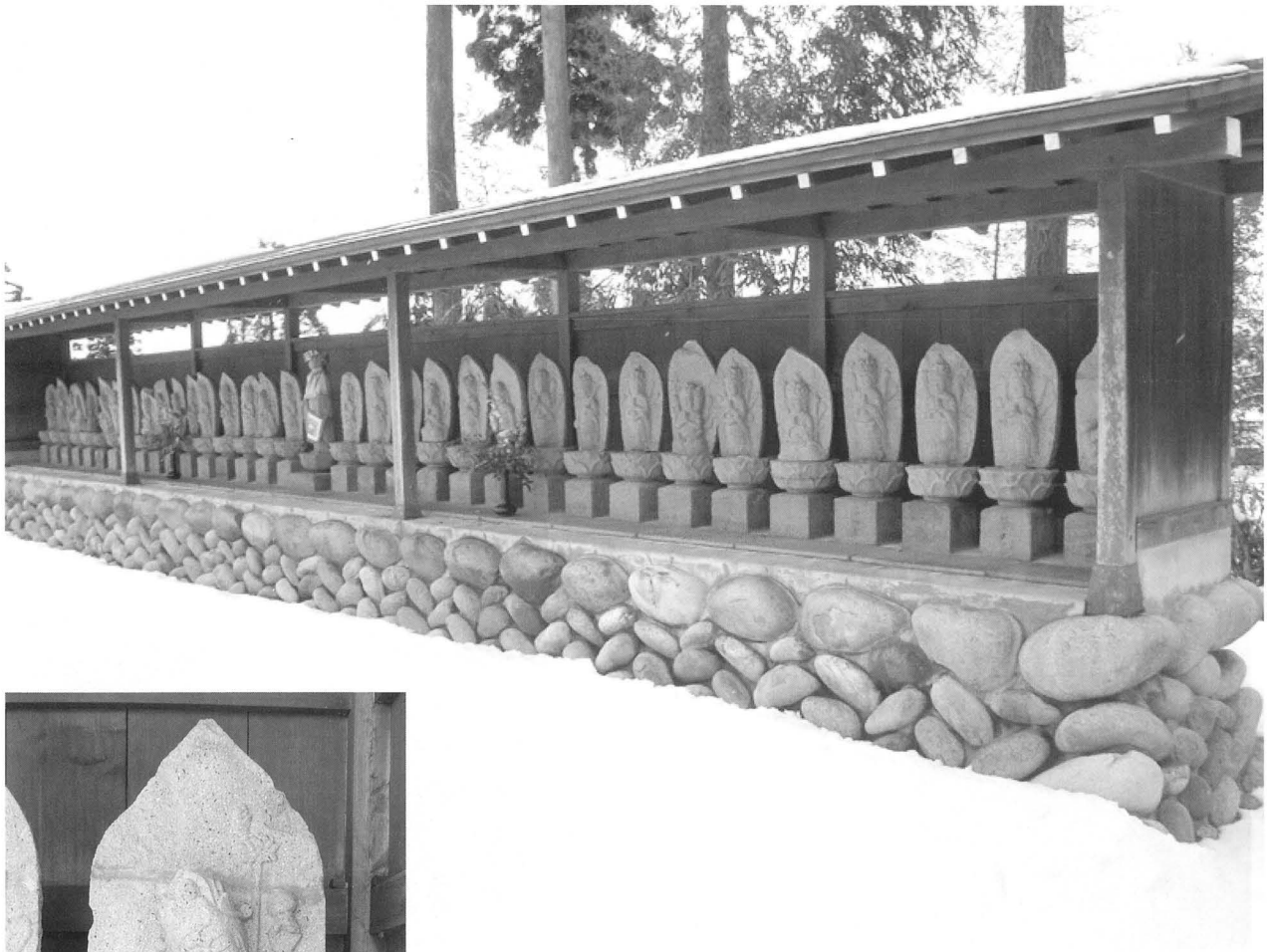


写真 20　三十三観音石仏全景（南西から）

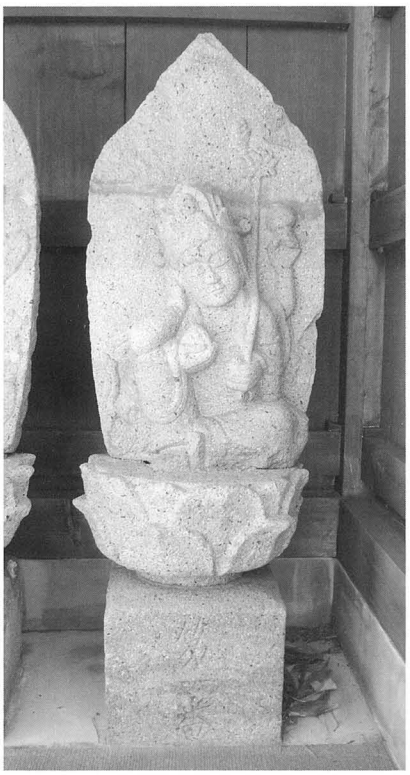


写真 21　第一番（如意輪観音）
＊那智山青岸渡寺（和歌山）

写真 22　第一番（如意輪観音）上半

写真 23　第一番基礎刻銘
「現住俊英代」

写真 24　宝篋印塔の位置

写真 26　相輪　九輪部分（上部は欠）

写真 25　宝篋印塔全景（南西から）

写真 27　相輪　請花側面

写真 28　相輪　請花正面

写真 29　笠　隅飾突起上部

写真 30　笠　隅飾突起細部

写真 31　軸 1　西面梵字キリーク

写真 32　反花・軸 2　西面（正面）刻銘

写真 33　軸 2　南面刻銘

写真 34　軸 2　南面刻銘

写真 35　請花・饅頭形・反花・基礎　西面

写真 36　饅頭形　西面浮彫（龍）顔部分

写真 37　基壇近景（南東から）

写真 38　基壇１段目刻銘（南面）

写真 39　基壇１段目刻銘（南面）部分

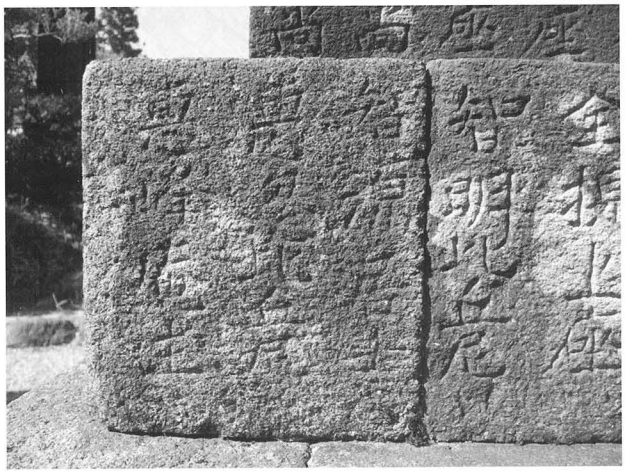


写真 40　基壇２段目刻銘（南面）部分

写真 41　基壇３段目刻銘（南面）部分

5　宝憧寺墓地石造物

(1) 調査の目的　宝憧寺住職墓地墓碑の詳細調査

(2) 調査日　平成 23（2011）年 8 月 31 日～12 月 14 日

(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）

(4) 所在地　富山市八尾町東町共同墓地内

(5) 調査概要

①宝憧寺史概要

真言宗長栄山宝憧寺（金刀毘羅堂）は、天保元（1830）年開寺、同 2 年富山藩から一千歩の寺地を拝領した。開寺にあたり、文政 12（1829）年八尾町年寄八丁屋五代四郎兵衛が世話人となり、当時立山芦峅寺で隠遁生活をしていた真言宗学侶龍淵を八尾町に招聘し、開寺の準備を進めた。1 世は四郎兵衛の弟弘全で、開寺まもなく死去したとされる。龍淵は 2 世となり、天保 8 年西岩瀬海禅寺住職快国の弟子快賢が 3 世となった。隠居した龍淵は、天保 8 年死去し、弘全の墓に一緒に葬られた〔八尾町史編纂委員会 1967・福江 1998〕。住職墓は現在東町字東下島の共同墓地中央に所在するが、当初からこの場所であったかは定かでない。

寺地は西町 2318 付近に存在した。現在は「金比羅堂」と呼ばれている。この他富山藩からは柳清水の地（現八尾町上新町字柳清水地内）に広い寺地があったとされるが、不明である（図 1）。

天保 14 年の町の構造を描いた「八尾町絵図」（富山県立図書館蔵）によれば、宝憧寺は町並みに囲まれた広大な寺地をもち、「真言宗／宝憧寺／千歩拝領地」と付記がある（図 2）。寺地は、東西に長い長方形状であり、山門は南辺中央に存在する。南の西下町通が参道になっていたとみられる。寺地内には 3 棟の建物が存在する。西寄りの崖地手前には本堂と見られる平入大型建物があり、3 間造に表現される。左右の間には文様のようなものが描かれるが、何を示すか不明である。中央には小形建物があり、柱 5

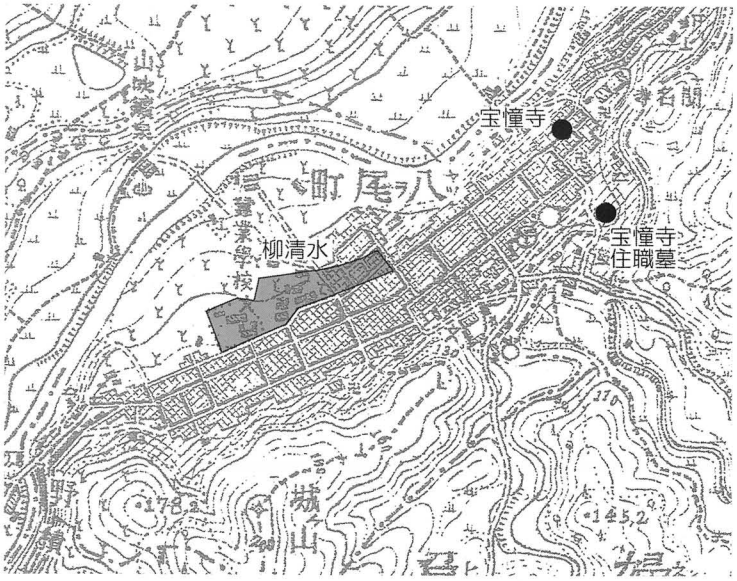


図 1　宝憧寺関係位置図(1：15,000)

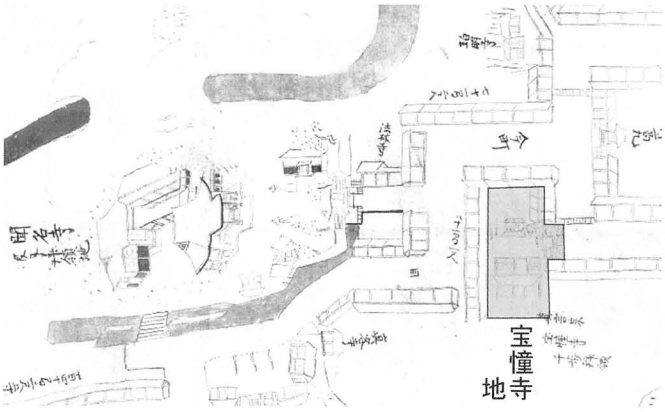


図 2　天保 14 年「八尾町絵図」における宝憧寺の位置

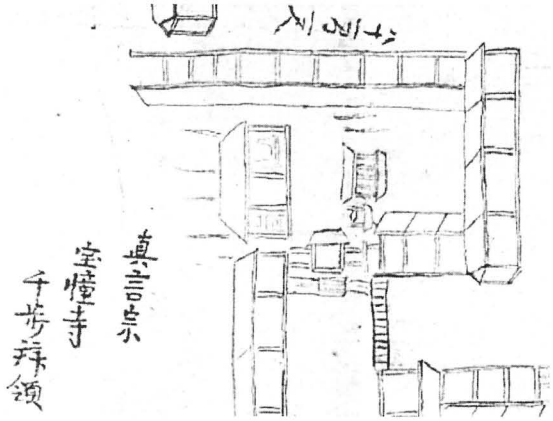


図 3　「八尾町絵図」にみる宝憧寺境内

本が描かれる。その南横には1間の小さな建物があり、下に楕円形がある。これは井戸を表現したものとみられる。したがって井戸横の建物は庫裏であろう（図3）。

八丁屋古川四郎兵衛は、西町在住で、町年寄をつとめた。「八尾宿役人留書」によれば、文化 14（1817）年7月手明町年寄の代理として八丁屋四郎兵衛の名を初見とする。その後文政5年にも町年寄となっている。八丁屋古川家は、明治元年金比羅堂の2軒隣にあった。明治30年同所に古川四郎兵衛後裔は在所していない〔八尾町史編纂委員会 1967〕。「明治24年当時八尾の自営業種」〔八尾町史編纂委員会 1967〕には、西町の古川治三郎「魚蚕種生糸」、同町古川治郎吉「石油綿紙荒物穀類白米炭」の 2 人がおり、ほかに西新町の古川四郎三郎が「蚕種小間物雑穀塩油紙鬢附茶蝋燭」を扱っている。この 3 人のうち、古川治三郎は明治初年存在し「八丁屋」を名乗っている。西町にはもう 1 人「八丁屋」を名乗る古川善兵衛がおり、これが古川治郎吉の先代とみられる。したがって四郎兵衛の後裔は欠所となる。残された可能性は、西新町の古川四郎三郎が、西町から移転したことであるが、その確認は今後の課題である。

②納骨堂（住職墓）

安山岩切石積による台形状の石造堂で、正面中央に門扉が設けられ唐破風屋根が付く（写真 1）。門扉は1枚石で、表面に7行にわたる刻銘がある。「柳比墓所者金比羅堂主墨／世護持之納骨所ニシテ□／世之住持永代香□回向之／典儀不可怠者也／維時昭和丁丑十二年八月功徳日／金比羅堂中興山森義□／修覆之」とあり、昭和12（1937）年に修復したことが記されている（写真17）。

この石造納骨堂の上には平坦な壇が設けられ、中央と右側に、丸彫石仏形墓石各1基（写真2・3）、左側に駒形墓石2基・舟形墓石1基の計 5 基の墓石がのる。手前側には石造花立と、何かをのせた円形台座がある。堂前には一対の円柱形燈籠が置かれている。

この納骨堂は、宝憧寺地の縮小に伴い、もと境内地にあった住職墓・関係者墓は、現在地に移転したという（大正8年頃）。

③納骨堂上墓石

A　丸彫石仏形墓石1（図4）

向かって右側にある墓石である。

安山岩製で、全高49.2寸（149cm）、結跏趺坐する弥勒菩薩座像である（写真4）。

本体は、高さ20.9寸（63.3cm）、幅14.5寸（43.9cm）、宝冠を被り、白毫が付く。目は伏目で、目尻がやや上がる。鼻梁は高く、三角形の鼻となる。口はやや小さく、顎は丸い。全体的に端整な顔付きである（写真5・6）。首には3本の線で三道を表す。両腕は右足上に置き、禅定印を結ぶ。印を結んだ両手の上には五輪塔（宝塔）を置く（写真7）。やや前傾姿勢で座す。左足の上に右足を置き、結跏趺坐のうち吉祥坐である。条帛と裳裙を付け、天衣を巻く。臂釧・腕釧を腕に付ける。

蓮台は、径16寸（48.5 cm）、高さ6.3寸（19.1 cm）で、主弁は2段×8葉となり、上段には間弁8葉を付し、計24葉である。主弁・間弁ともに立体的な弁脈をもち、主弁は10本である。

饅頭形は、断面半円形で、最大径13寸（39.4 cm）、高さ5.5寸（16.7 cm）。正面中央には宝珠?を持つ飛天を置き、左右に祥雲文を浮彫する（写真8）。

台座は六角柱形で4段構成となる。1段目は反花で、2段目と1石で作る。1辺の長さ7.8寸（23.6cm）、高さ5.5寸（16.7cm）である。主弁6葉、間弁6葉の計12葉である。各弁には8本の立体的な弁脈が表現される。弁先端は尖って反り、弁先には三角形の切込みがある。2段目は上下2段の格狭間とする。上段は格狭間形に一段彫込み、波濤文を浮彫りする。正面側から見える3面のみ彫刻する。3面とも波濤の意匠は異なる。下段は高さが狭く、上段よりわずかに大きい。楕円形状に一段彫込み、

細かなハツリ痕を残した意匠としている（**写真 9**）。

台座 3 段目は、1 辺の長さ 9 寸（27.3cm）、高さ 6.8 寸（20.6cm）である。5 面に刻銘がある。正面は「当院開山／梵字種子「ボ・ブ」／弘全法印」と太い楷書の陰刻である（**写真 10**）。梵字種子「ボ・ブ」は準提（準胝）観音を意味する。現在は弥勒菩薩と呼んでいるが、本像が準提（準胝）観音として製作された可能性がある。宝憧寺開山弘全法印が供養者であることを示している。右 1 面は「文政元／寅六月／廿四日寂」であり、宝憧寺開山弘全法印の没年月日を記す。左 1 面は「施主／八丁屋／四良兵衛」で、この墓石の造立者が八尾町年寄八丁屋四郎兵衛であることを示す。弘全は 4 代四郎兵衛の弟である。左 2 面には「作者／馬瀬口村／中川甚右エ門」とあり、馬瀬口村（現富山市馬瀬口）に工房を持つ常願寺川石工中川甚右衛門に発注され製作したものであることがわかる。右 2 面には「建主?先祖／古川治郎兵エ」とあるが、字体や彫り方が異なり、後刻とみられる。建主?は施主・願主で、先祖古川治郎兵衛が立てたことを示す。裏面には「明治年間ニ／宝憧寺墓□／き依テ卅四年／六月宝憧／寺墓ト共／之ヲ建設ス」とある。文字は右 2 面と同じであり、同時に追刻されたものと考えられる。内容は、明治年間に宝憧寺信徒となり、明治 34 年 6 月に宝憧寺墓と共にこの墓石を建てたというものである。右 2 面と合わせて考えると、明治 34 年 6 月に古川治兵衛が建設したことになるが、本像は天保元年頃の造立のものと考えられ（p48 参照）、ここでいう建設は、移転設置と考えるべきであろう。金毘羅堂庵主によれば、大正年間宝憧寺境内縮小の際この墓石は縁故者が引き取り、平成 23 年 5 月に宝憧寺墓地に戻されたという。この経緯が記されたと考えれば、建設の意味が上記の内容であることが明らかになる。

台座 4 段目は、1 辺の長さ 10 寸（30.3cm）、高さ 4 寸（12.1cm）である。各面の上端 1 寸、左右 1.2 寸（3.6cm）幅が平坦整形され、その内側は粗ハツリ痕を残して意匠とする。
台座の裏面については、3 段目の刻銘以外は加工を省略している。

B　丸彫石仏形墓石 2（図 5）

中央に主尊のように置かれた墓石である。

安山岩製で、全高 47 寸（142.4cm）の弥勒菩薩座像である（**写真 11**）。

本体は、高さ 20.5 寸（62.1cm）、幅 21.5 寸（65.1cm）。顔は墓石 1 のように前傾せず、正面を向く。体躯に比べ頭部が大きい（**写真 12**）。頭には宝冠を被り正面には化仏を懸ける。額には白毫が付く。目は伏目で、目尻がやや上がる。鼻梁は太く、やや低い。頬から顎にかけてふっくらとし、下顎が丸い。全体的にふっくらとし穏やかな顔付きである（**写真 13**）。首には 3 本の線で三道を表す。右手は施無畏印を結び、左手は棒状の持物を握る形で、中央に穴が貫通する。金属製の蓮華が差し込まれたものと推定されるが、持物は失われた（**写真 14**）。条帛と裳裙を付け、天衣を巻く。

蓮台は、径 23 寸（69.7 cm）、高さ 7.5 寸（22.7 cm）で、主弁 6 葉＋間弁 6 葉の計 12 葉である。主弁・間弁ともに立体的な弁脈をもち、主弁は 8 本である。

饅頭形は、断面半円形で、最大径 17.5 寸（53cm）、高さ 5 寸（15.1 cm）。正面中央は一段彫下げ波濤文を浮彫りする（**写真 14**）。

台座は六角柱形で 2 段構成となる。1 段目は反花で、2 段目と 1 石で作る。1 辺の長さ 11.6 寸（35.1cm）、高さ 2.5 寸（7.6cm）である。主弁 6 葉、間弁 6 葉の計 12 葉である。各弁には 8 本の立体的な弁脈が表現される。弁先端は尖って反り、弁先には三角形の切込みがある（**写真 15**）。

2 段目は、1 辺の長さ 11.6 寸（35.1cm）、高さ 11.5 寸（34.8cm）である（**写真 16**）。5 面に楷書体で刻銘がある。正面・右 1 面・右 2 面・左 1 面の 4 面は法名で、左 1 面は 3 名、その他面各 4 人の計 17 人に及ぶ。うち 15 人は院号保持者で、2 人は位号を持つ満 18 歳未満の子供である。左 2 面

には「安政二年／閏六月建之／古川四郎兵衛」と行書体で陰刻がある。これにより、この墓石が安政2（1855）年八丁屋四郎兵衛により造立されたことがわかる。四郎兵衛が造立する契機となった供養者15人は、四郎兵衛血縁者とその先祖で、存命者も含む。安政2年段階において八丁屋四郎兵衛が町年寄であったかどうかを確認する史料は未確認である。

C　駒形墓石1

本体は、高さ20.5寸（62.1cm）、幅8.5寸（25.8cm）、奥行は面加工幅4.6寸（13.8cm）で安山岩製である。裏面は、安山岩玉石をハツリ整形したままの状態である。上部先端は手前に反る。正面は先端のない花頭形に一段彫り窪め、その中に法名等を楷書で陰刻する。上部中央に梵字「ア」（胎蔵界大日如来）を小さく彫り、その下に2人の法名・没年を計3行に彫る。右は「宝暦九卯十一月四日／覚清？祐円法師」、左は「（法名）信女」とあり、左の法名の外側に没年は見えない。没年の文字は法名より小さい。中央下部には3文字あるが判読できない。霊位のような意味であろうか。台座は幅40cm、奥行37cm、高さ20cmの方形で、下が細くなる。別物の代用である。

宝暦9（1759）年は宝憧寺成立以前のものであることから、古川四郎兵衛の縁故者と推定される。

D　駒形墓石2

本体は、高さ20.5寸（62.1cm）、幅8.5寸（25.8cm）、奥行は面加工幅4.6寸（13.8cm）で、駒形墓石1と同寸・同製作技術である。安山岩製。正面刻銘は、上部中央に梵字「アーンク（胎蔵界大日如来）」を小さく彫り、その下に法名・没年を計3行に彫る。「寛延三年女？／慈浄院秋汀妙挂沙弥尼／八月十九日／霊位」とあり、寛延3（1750）年没である。霊位の語の存在から、曹洞宗檀家であると考えられる。

台座は長方体で、幅39cm、奥行32cm、高さ12.5cmである。本体とはホゾ穴で組合わされ、台座側に受穴が穿たれる。台座上面手前側には、中央に方形の窪み、その左右に円筒形の彫込みがある。前者は線香置き、後者は蝋燭穴である。

寛延3（1750）年は宝憧寺成立以前のものであることから、古川四郎兵衛の縁故者と推定される。

E　舟形墓石

安山岩製の舟形光背地蔵菩薩立像である。本体高さ18.5寸（56cm）、幅9.7寸（29.4cm）で、足下に台部を設ける。蓮台は平面楕円形で、長さ11.2寸（33.9cm）×6.6寸（20cm）、高さ5寸（15.2cm）である。蓮台上面を本体幅分彫込んで組み合わせているが、ずれがあり、別のものを代用したものと考えられる。

本体は、合掌した地蔵菩薩立像である。目は一直線で、顔面は平坦である。頭部は立体的であるが体部は立体感が乏しい。光背右に「（梵字）ア　（居士号法名）　霊位」、光背左に「延享五天辰五月三日」と楷書で陰刻がある。

蓮台の蓮弁文様は、楕円形横長の単弁6葉である。蓮台下は自然石玉石であるがこれも別物である。

舟形墓石は、延享5（1748）年死去した人物の墓碑であるが、宝憧寺成立以前のものであることから、古川四郎兵衛の縁故者と推定される。

(6)宝憧寺住職墓造立の経緯

東町地内に所在する住職墓は、当初からそこに所在したかどうかは不明であるが、墓石1裏面の追刻により、明治34年に墓石1が移転したことが明らかになる。その理由は、寺地の縮小に伴うものと推定される。旧寺域の広さからおそらく住職墓は境内に置かれていたと推測され、寺地の縮小によって墓地の移転も余儀なくされたものであろう。その年代は大正期と伝承されているが、明治34年であろう。納骨堂扉刻銘では昭和12年金毘羅堂再興とあるが、その際に現在の納骨堂も現在地に

建立あるいは改修されたと理解される。

墓石１は、台座正面銘が示すように、開基弘全の墓碑である。宝憧寺過去帳（富山県〔立山博物館〕寄託）によれば、二十四日欄に「当寺第一世本願開基阿闍梨大僧都法印弘全大和尚　文政元戊寅年六月五十六才死」とあり、台座銘と没年は一致している。また過去帳には「弘全師之産者当所八丁屋三代登台院弟也／於海禅寺出家成高野学衆住山之次当山建立発心」と付記があり、3代四郎兵衛の弟とする。3代四郎兵衛は文化8（1811）年没である。また過去帳掲載情報から4代四郎兵衛も弘全の兄であり、文政11（1828）年没である。弘全の死去した文政元年は4代四郎兵衛の存命中のこととなる。過去帳では5代四郎兵衛は4代四郎兵衛の長男としており、弘全の甥に当たる。宝憧寺建立は弘全とその兄3代四郎兵衛が発願し、4代、5代と引き継がれ、ようやく5代において龍淵の助力を得て正式に山号寺号を得た。この間3代四郎兵衛の妻（観蓮院）がずっと補佐しており、その熱意のほどは過去帳の中で「希代未曾有之大信善女也」と評されている。このような流れの上で、正面台座銘を見ると「当院開山」とあり、天保元年開山以降にこの墓が記念碑的に製作されたものと考えられる。この場合施主は5代四郎兵衛と推定される。

中央に鎮座する墓石2は、安政2年7代四郎兵衛が造立した。台座銘は初代から6代までの八丁屋四郎衛門の家系を記しており、先祖供養の目的で造立したものである。安政2年6月は関係者の忌日ではないが、開山から25年経過した時期である。造立時期は、実母である6代目四郎兵衛妻の忌日安政3年1月より早い。これは生前法名のためであろうと思われる。

以上により、墓石1は弘全のための供養塔、墓石2は弘全に関係した八丁屋四郎兵衛関係者の先祖供養のための供養塔としての性格を有している。また、納骨堂に納められた弘全及び八丁屋四郎兵衛関係者を示す墓誌銘としての性格も有しているものである。八丁屋四郎兵衛関係者の墓石が中央に鎮座しているのは、弘全供養塔が境内縮小の折、四郎兵衛と最も近縁者であった別家の八丁屋が引き取り、近年まで所在しなかったことによるものである。この弘全供養塔が本来の納骨堂上に戻されたことは、寺史上極めて重要なことであったといえる。

図１　住職墓墓石１実測図

墓石１・饅頭形浮彫文様（飛天・祥雲文）

墓石１・台座正面浮彫文様（波濤文）

墓石１・台座右１面浮彫文様（波濤文）

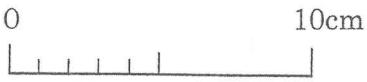
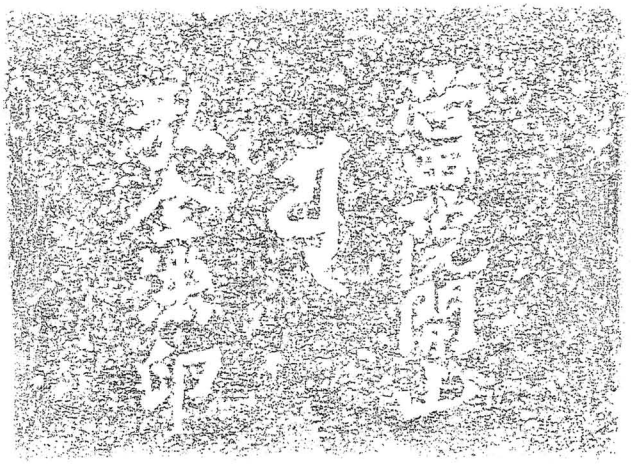
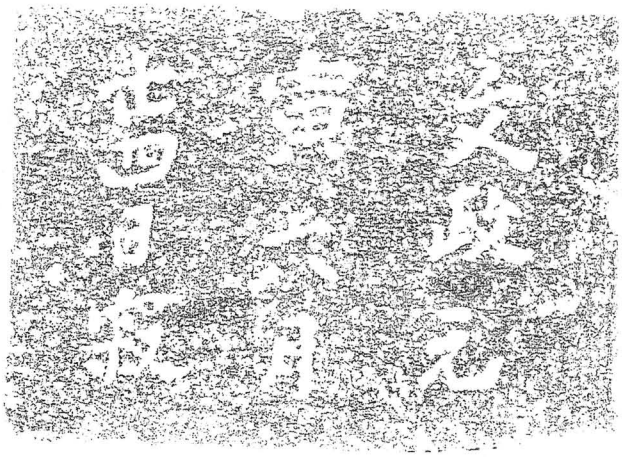


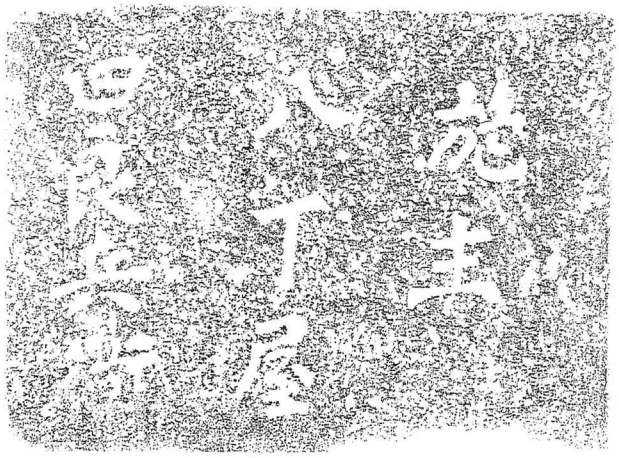
図２　墓石１饅頭形・台座文様拓影



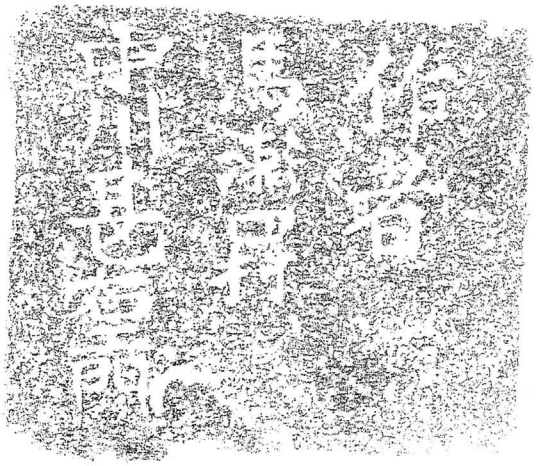
墓石１・台座正面刻銘



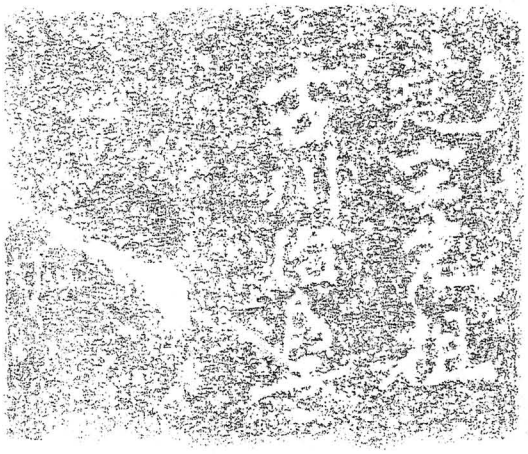
墓石１・台座右１面刻銘



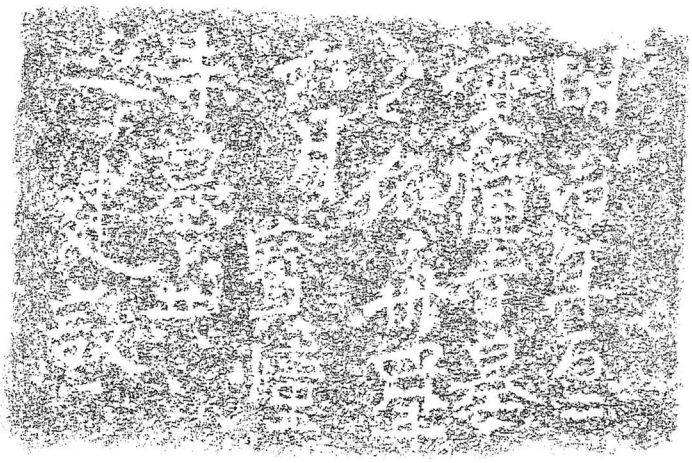
墓石１・台座左１面刻銘



墓石１・台座左２面刻銘



墓石１・台座右２面刻銘

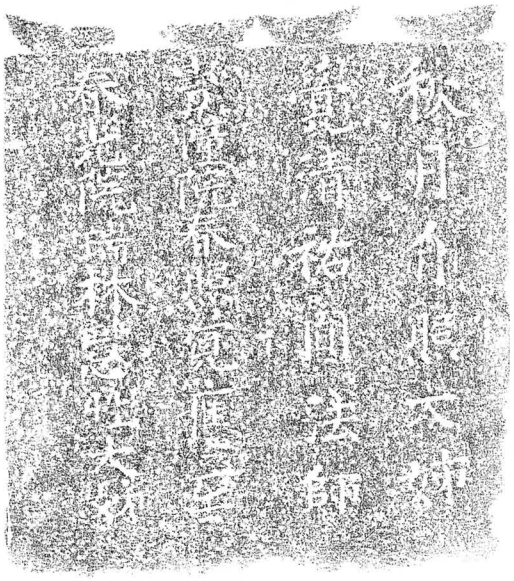


墓石１・台座裏面刻銘

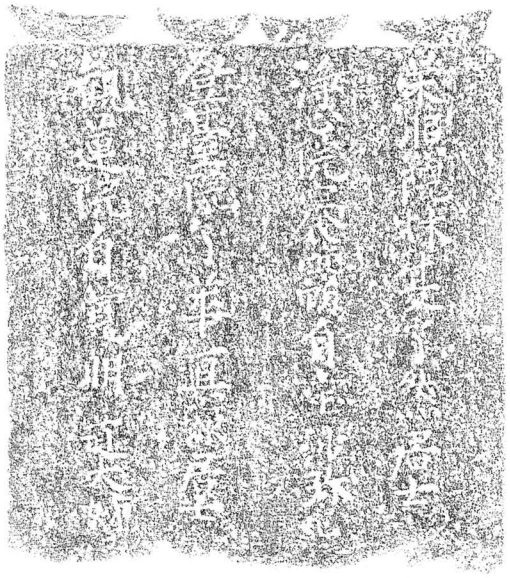
0　10cm

図３　台座銘拓影

図４　住職墓墓石２実測図

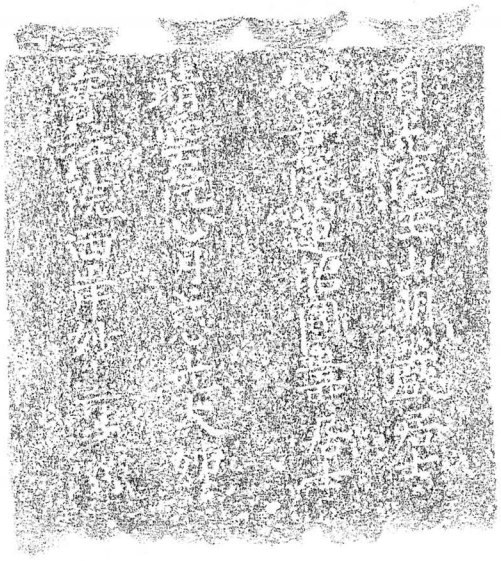


墓石２・台座右１面刻銘

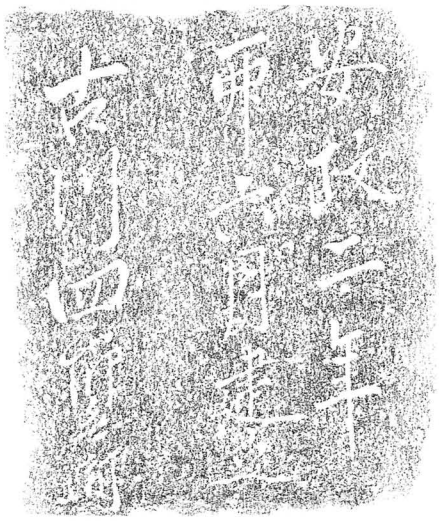


墓石２・台座右２面刻銘

墓石２・台座左１面刻銘



墓石２・台座正面刻銘



墓石２・台座左２面刻銘

図５　墓石２台座刻銘拓影

0　10cm

写真1　宝憧寺住職墓全景（西から）

写真2　石仏形墓石

写真3　同（右斜め前から）

写真4　墓石1

写真5　墓石1顔

写真6　墓石1顔

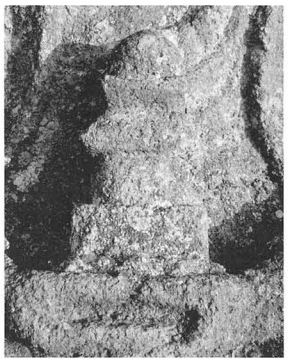


写真7　墓石1持物

写真9　墓石1台座（波濤文）

写真8　墓石1饅頭形（天女＋祥雲文）

写真10　墓石1台座（刻銘）

写真 11　墓石 2

写真 12　墓石 2 仏像部

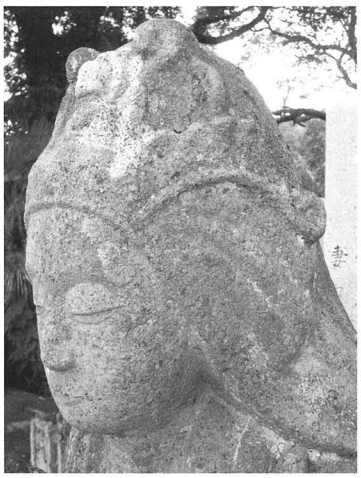


写真 13　墓石 2 顔

写真 15　墓石 2 左手孔

写真 14　墓石 2 饅頭形（波濤文）

写真 16　墓石 2 台座（刻銘）

写真 17　住職墓室入口扉（刻銘）

写真 18　駒形墓石 1

写真 19　駒形墓石 2

写真 20　舟形墓石

6　考察

(1) 宝篋印塔造立について

宝篋印塔はいわゆる宝塔であり、その中に宝篋印陀羅尼経を奉納することにより功徳を得られるとして、宝篋印塔の造立が鎌倉期以降盛んに行われた。中世期における宝篋印塔は、塔身全部を刻銘とするものはほとんど見当たらず、梵字種子や阿弥陀如来坐像等像容を刻むものが主体的である。近世期における宝篋印塔は、形態や造立目的等の多様性から、石塔形式としての確立した分類編年はなく、中世期からの延長として概括的な変化変容について述べられることが多い。刻銘からのアプローチが一部あるが、特に塔内に納められた経文あるいは礫石経との関係性の分析は、内部の発掘例がほとんどないため検討事例が少ない。近世期における宝篋印陀羅尼経奉納方式の解明はまだ不十分であるといえる。

宝篋印塔の名称の起こりは、宝篋印陀羅尼経の名称が起源とされている〔日野 1976 ほか〕。元来は石塔に納められるべき経典は宝篋印陀羅尼経という前提が成り立つべきである。近世期における宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経の関係を石塔銘文から検討した研究として、三木治子による研究がある〔三木 1998・1999〕。宝篋印陀羅尼経を塔の銘文として引用するものは梵字表記を含め 23 例があり、ほかに多層塔に納められたとみられる宝篋印陀羅尼を書いた礫石経出土例が 1 例報告されている。後者は安永 7 年造立で、礫には表裏に 1 字ずつ梵字を記すものが主体である。これらの例でも宝篋印塔銘文・礫石経ともに宝篋印陀羅尼である例はほとんど見当たらない。

富山県呉東地区における宝篋印塔の造立は、江戸中期 18 世紀後半以降に隆盛し、主として寺院境内に設置された。密教では真言宗・天台宗、禅宗では曹洞宗寺院を中心としており、3mを超える大型塔が主体である。

富山市に所在する真言宗寺院五穀山龍高寺（加賀藩領）・医王山東薬寺（富山藩領）の宝篋印塔は、18 世紀末から 19 世紀初頭に造立されたもので、軸銘文に宝篋印陀羅尼経を刻銘し、宝篋印陀羅尼経（礫石経）の書写納入を伴う供養が行われたことが明らかになった〔古川・伊集 2008、古川・蓮沼 2009〕。宝篋印塔内部の調査例が少ない現在、軸銘文・礫石経ともに確認できる例をこれ以外に挙げることはできないが、少なくとも軸銘文だけをとってみると、18 世紀後半から 19 世紀中葉の真言宗寺院において、宝篋印陀羅尼経を刻銘した宝篋印塔が 8 寺院で確認されており、同様の供養形態が 2 寺以外にも広がっている可能性が高い（**表 1**）。

旧来の銘文研究では、このような石塔における宝篋印陀羅尼経の引用例が江戸期に増加している傾向は指摘されつつも〔船場 2002〕、それが中世から継続する中で全国的に回帰的変容を遂げた形態なのか、それとも特定地域あるいは特定宗派における一時的・限定的な現象であるのか、さらにその変容の理由などについては不明のままであった。

この 2 つの寺院で共通した宝篋印塔造立祭式が認められることは、富山藩・加賀藩の領域を越えて実質的な信仰圏が存在していたことがわかる。東薬寺過去帳における信徒分布域の調査で、加賀藩域にある東薬寺が、富山藩域でも多く信徒を有するだけでなく、信徒獲得活動を行っている事実が明らかにされた。また過去帳調査等により、越中国内の広い地域において師弟関係等に基づく住職の移動や修行・得度を行うための交流が生じていたことが明らかになった〔伊集 2009〕。この意味で、越中国内における真言宗寺院では、表面上それぞれの藩支配を受けながらも、実質的には「越中国」という単位で信仰圏とその交流を行っていたといえよう。

表1　宝篋印塔祭祀形態

年	西暦	寺院名	所在地	軸銘文	礫石経	石工	石工所属	備考
安永8	1778	曹洞宗不動寺	富山市上滝	底哩三昧耶不動尊 聖者念誦秘密法	不明	不明		大川寺24世祖山
天明6	1786	真言宗千光寺	砺波市芹谷	宝篋印陀羅尼	不明	佐伯伝右衛門	富山(神通川)	63世順遍
寛政3	1791	真言宗常楽寺	富山市婦中町千里	宝篋印陀羅尼	不明	佐伯伝右衛門	富山(神通川)	
寛政7	1795	真言宗刀尾寺	富山市太田南町	宝篋印陀羅尼	不明	佐伯伝右衛門	富山(神通川)	礫石経投入口あり
寛政9	1797	真言宗龍高寺	富山市月岡町	宝篋印陀羅尼	宝篋印陀羅尼	中川甚右衛門ほか3	常願寺川	60世尭教。四国遍路八十八ヶ寺本尊刻
享和4	1804	真言宗各願寺	富山市婦中町長沢	宝篋印陀羅尼		観成	常願寺川	
文化4	1807	真言宗東薬寺	富山市牧野	宝篋印陀羅尼	宝篋印陀羅尼	不明		花崎村十村野口氏
文政3	1820		富山市下番	宝篋印陀羅尼	不明	不明	常願寺川	中川家個人墓地
天保4	1833	真言宗真興寺	富山市梅沢町	宝篋印陀羅尼	不明	不明		金岡勝久造立
安政3	1856		富山市五番町	中陰経(曹洞宗？)	不明	中川甚右衛門	常願寺川	中川家個人墓地。石工本人願主。曹洞宗光厳寺墓地
安政5	1858	真言宗帝龍寺	富山市寺家	宝篋印陀羅尼	不明	浅吉	神通川	浅吉は常願寺川石工から移転

その後江戸後期19世紀代に入ると、寺院以外にも個人墓地において宝篋印塔の造立を行うことが始まった。造立者は一般庶民ではなく、十村・庄屋クラスの富裕層であり、その家族墓に供養塔として併設されている。石工の在村する常願寺川中上流近辺に数基が認められているのみである。中川甚右衛門家は、新川郡十村には見当たらずその家格等は不明であるが、石工経営による富裕層化によるものと推定することができる。個人墓の石塔は、寺院のものよりやや小さいものが多いが、それと同様の大型品もわずかにある。文様や銘文等はやや簡素化されているものの、宝篋印陀羅尼経を軸銘文に引用するなど、先に見た寺院における宝篋印塔祭祀形態をそのまま移用している可能性が高い。

このような宝篋印陀羅尼の刻銘及び礫石経の宝篋印陀羅尼経書写という一定の宝篋印塔造立祭式は、主として越中東部における真言宗寺院において隆盛したとみられる。それは現在みる組寺院の関係、あるいは真言宗寺院における住職間異動に基づき、その関係性の中で伝播拡散したのであろう。

一方、軸銘文に宝篋印陀羅尼経を引用した最古の例は、天明 6 年砺波市千光寺である。この製作石工は、神通川石工佐伯伝右衛門である〔尾田 1995〕。伝右衛門は富崎村（現富山市婦中町富崎）在住で〔古川 2011B〕、寛政 7 年までの 10 年間に製作した 3 基の宝篋印塔には、いずれも宝篋印陀羅尼経の刻銘を認めることができる（**表 1**）。したがって、現在のところ、このような宝篋印塔祭式を取り入れた人物は、千光寺 63 世順遍と推定される。順遍は、金沢養智院より入寺し、天明 6 年から寛政 3 年まで在住した〔砺波郷土資料館 2002〕。宝篋印塔造立は入寺初期のことである。

龍高寺・東薬寺宝篋印塔は、常願寺川石工の製作になるもので、いずれも伝右衛門以後のものである。伝右衛門最後の寛政 7 年宝篋印塔は、富山市太田南町刀尾寺に所在するが、そこは常願寺川石工の領域に属する。石工によって出現時期が異なるのは、大型石塔製作の技術・能力の有無に関わっているのかもしれない。

(2) 製作石工ついて

①常願寺川石工中川甚右衛門について

本稿で取り上げ宝篋印塔・石仏・墓石等の石造物はいずれも 18 世紀後半以降、古い安永 5 年祇樹寺燈籠を除けば 19 世紀第 1 ～第 3 四半期の造立である。この時期における製作石工は、石造物に石工名を刻銘として残すことが多い。それらをみると、本稿で取り扱った石造物の分布地域には、常願寺川産安山岩を使用した常願寺川石工〔古川 2011A・C〕・神通川上流の神通峡産砂岩を使用した神通川石工〔古川 2011B〕、それらの両方の石材と産地不明の安山岩を使用した富山町石工〔古川 2012A〕などが存在する。これら近世石工の特徴としては、河川の玉石（転石）を使用する比率が高く、それらの石材が容易に入手可能な場所に工房を構えていることがあげられる。

本稿で調査した石造物のうち、3 基に常願寺川石工中川甚右衛門の銘が確認された。

常願寺川石工中川甚右衛門は、文化文政期を中心に活躍した上馬瀬口村（現在富山市馬瀬口）在住

の石工で、四代にわたり石仏を製作したこと、および作例の紹介は前田英雄氏により報告されたところである〔前田 1998〕。その後古川知明は、甚右衛門作石仏についての概要報告を行った〔古川 2011A〕。それによれば甚右衛門の作風は、文政 6 年富山市文殊寺の笠付円盤形石仏の出現をもって大きく変化する。それ以前は舟形光背石仏で、甚右衛門を最も特徴づける光背の祥雲文は文化 6 年頃から出現する。笠付円盤形石仏は、これまで牧喜右衛門など常願寺川石工のみが製作し、それを特徴づける特異な石仏として知られてきた。笠付円盤形石仏は、文政 6 年富山市文殊寺例が初出であり、甚右衛門が最初に製作した石工である。円盤周囲には光明真言梵字を円にして一周させて彫る必要から、円盤形という特殊な形態が生まれたものと理解される。発案者は真言僧籍にある人物であろう。笠付円盤形出現以後においてはこれが主流となるが、舟形石仏も継続する。その後天保 14 年に丸彫石仏、さらに笠付四角形石仏等の新形式も加わる。現在このような変遷は、数代続いたという世代交代を反映していると思われる。

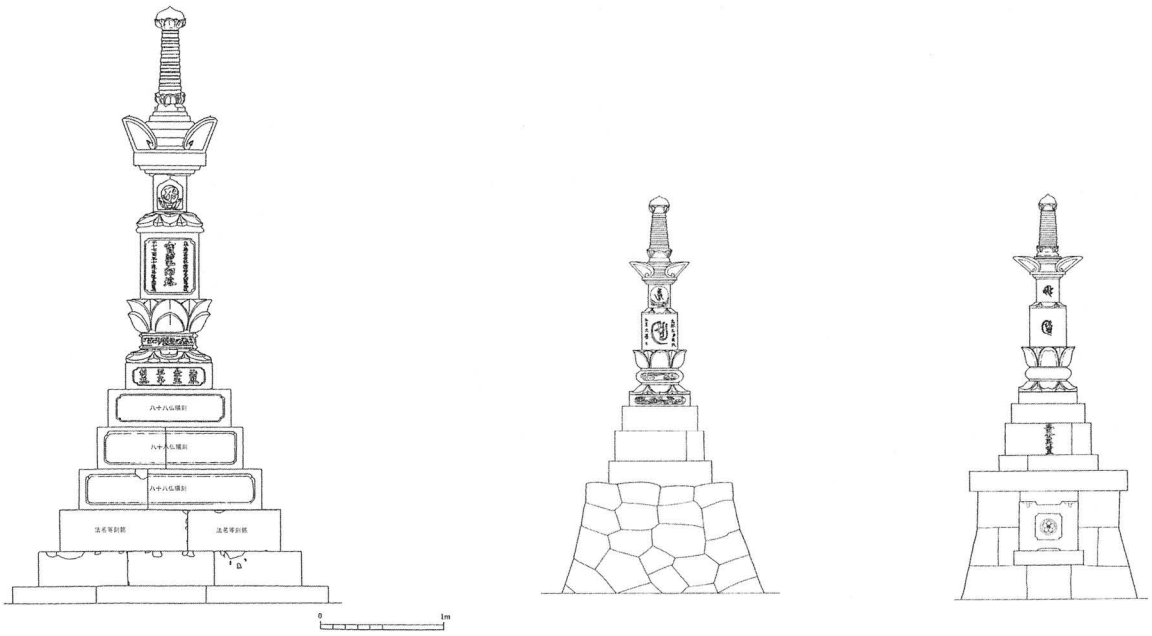
したがって中川甚右衛門は、舟形石仏の光背に初めて祥雲文を配した、初めて笠付円盤形石仏を製作したなどの諸点において、常願寺川石工における石仏製作の先駆的役割を果たすとともに、卓越した像容は、それまでになかったリアリティを顕出することで、その後の常願寺川石工における伝統的基盤を築いた石工として高く評価できる。甚右衛門の特徴的な祥雲文のある石仏は、その後の常願寺川石工集団において、手本とすべき作品として多くの習作がなされた。それは修業の一環とされたとみられ、昭和時代まで製作が継続した。また、甚右衛門の作品は、工房所在地を中心とした常願寺川周辺地にとどまらず、婦負郡富山町、さらに遠く離れた射水郡領域にまで分布する。遠隔地のものには、刻銘に「新川郡」「上新川郡」等の郡名を入れるとともに、製作年代を刻まないという一致した特徴がみられる。これらは製作当初から遠隔地に配給されることが意識されており、甚右衛門作石仏が優秀であるという情報を得た者が注文して製作を依頼したことが推定される。このような遠隔地への供給は、その後の常願寺川石工においては牧喜右衛門に一例見られるのみで、石工製品の一般的な分布からみると特異な状況といえる。甚右衛門は、石仏を主体として製作したが、他に狛犬・宝篋印塔を少数製作している〔古川 2011C〕。

②中川甚右衛門製作の宝篋印塔とその他の宝篋印塔

刻銘により中川甚右衛門が製作したことが明らかな宝篋印塔は、富山市月岡町の真言宗五穀山龍高寺、上市町大岩の真言宗大岩山日石寺、立山町下米沢の曹洞宗禅証寺に各 1 基存在し、寛政 9（1797）年、文政 4 年、天保 4 年の順に造立された。いずれも大型塔である。龍高寺宝篋印塔は 4 人の共作で、甚右衛門は中堅石工として腕を振るった〔古川・蓮沼 2009〕。光厳寺中川家墓地は、願主として中川甚右衛門の名があるが、報告のとおり本人が石工として製作したものと推定できる。刻銘のある宝篋印塔はこの 4 例であるが、これにより、中川甚右衛門における宝篋印塔の製作期間が、少なくとも最初期の寛政 9 年から幕末の安政 3 年まで 60 年間にわたっており、これは甚右衛門の製作期間にほぼ等しい。

また、この 4 例の型式変化の概要をみると、龍高寺宝篋印塔が基壇に四国遍路八十八ヶ寺本尊仏の像容を陽刻するという特殊な形態が加わることを除くと、部材の基本構成とその順序はほとんど変わっておらず、また常願寺川産角閃石安山岩を基礎より上の部材で多用する。一方で部材各部の文様・意匠の変化は認めることができる。その大まかな内容を記す。

九輪は、相対的にみて太く短くなる。笠の隅飾突起は順次開いていく。笠の上下の段数が少なくなる。請花・反花の主弁表現は、二重弁・弁脈なし→上下 2 段の弁・弁脈あり→単弁・弁脈なしと変化する。饅頭形は、上下タガ付き・浮彫文様→断面半円形・浮彫文様→断面半円形・文様なしと変化



寛政９（1797）
月岡龍高寺

文政３（1820）
下番中川家墓地

安政３（1856）
光厳寺中川家墓石

図１　中川甚右衛門銘の宝篋印塔の変遷

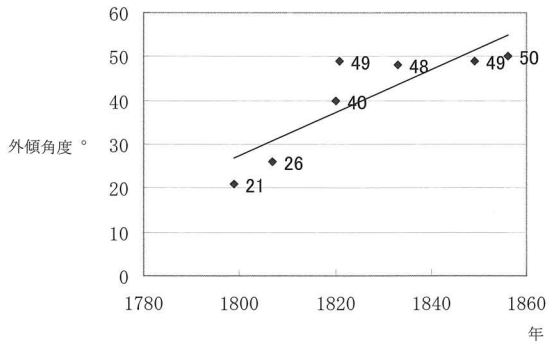
する。基礎方台部は最終段階は無文となる。基壇は天保頃まで段数が増え、最終段階は段数が減る。

このような変化を追うことにより、石工銘のない宝篋印塔について、甚右衛門が製作した可能性について検討することができるようになる。ここでは、笠の隅飾突起における外傾角度に注目する。表２は常願寺川石工作宝篋印塔の一覧、グラフ１はその隅飾突起の外傾角度を年代との相関関係でグラフ化したものである。これによれば、年代が下るごとに隅飾突起の外傾角度が開いていき、その変化はほぼ一定の比率に従っていると概ね言うことができる。したがって、常願寺川石工の間においては、隅飾突起の外傾角度がある一定の規範として認識されていたことを示唆する。

表2 常願寺川石工製作宝篋印塔における隅飾突起角度の変遷

所在地		石工	年代		角度
富山市月岡	龍高寺境内	中川甚右衛門を含み4	寛政9	1797	21
富山市婦中町長沢	各願寺境内	観成(善名村)	享和4	1804	20
富山市八尾町深谷	祇樹寺境内	不明	文化2	1805	53
富山市牧野	東薬寺境内	不明	文化4	1807	26
富山市下番	中川家墓地	不明	文政3	1820	40
上市町大岩	日石寺境内	中川甚右衛門	文政4	1821	49
立山町下米沢	禅証寺境内	中川甚右衛門	天保4	1833	48
富山市西番	田辺家墓地	不明	嘉永2	1849	49
富山市五番町	光厳寺中川家墓地	中川甚右衛門	安政3	1856	50

グラフ1　宝篋印塔笠隅飾の角度の変遷



このような変遷の過程において、本稿で取り上げた石工名のない下番中川家・田辺家の２基の宝篋印塔は、いずれも小型であるが、その規範の範疇内に収まり、常願寺川石工の作品であることは確実といえる。このうち文政３年下番中川家宝篋印塔は、光厳寺中川家宝篋印塔と規模・蓮弁表現が近似しており、大型宝篋印塔の変遷とは意匠・文様の面でやや流れを異にする。嘉永２年田辺家宝篋印塔も蓮弁表現が古い二重弁形態であることなど、同様の違いがある。したがって、寺院境内造立と個人墓地造立のものは系統を別に考える必要があるかもしれない。

一方、祇樹寺宝篋印塔の隅飾突起の外傾角度はその規範の範囲からはずれるデータを示している。その造立年代を基準にすれば外傾角度は20度から26度の間に収まる必要がある。しかし祇樹寺宝篋印塔はそれより外に広がっており、角度から推定すると安政3年以後に位置づけられるべきである。祇樹寺宝篋印塔は構成や石材から常願寺川石工の特徴を示すが、上記のような差異が生じた理由として、①近年一度解体されており破損した笠部材が別の幕末の石材と取替えられた、②安政3年以後の造立であったが、軸2の銘文には文化2年と彫った、③常願寺川石工と関係のある別地域の石工の製作による、等が考えられる。今のところ①の理由が有力な候補である。

参考文献

伊集守道 2008「東薬寺信徒の分布状況とその内部構造―過去帳を素材に―」『大山の歴史と民俗』第11号　大山歴史民俗研究会

尾田武雄 1995「芹谷山千光寺周辺の石造物中間報告」『土蔵』第8号　土蔵友の会

船場昌子 2002「南関東における礫石経の様相」『江戸の祈り』江戸遺跡研究会

続八尾町史編纂委員会 1973『続八尾町史』

高瀬重雄編 1994『日本歴史地名大系16　富山県の地名』平凡社

徳山暉純 1976『梵字手帖』木耳社

砺波郷土資料館 2002『真言の古刹　芹谷山千光寺の方丈さんたち』展示図録

中村太一路監修 1987『太田郷土史』太田郷土史編纂委員会

日野一郎 1976「Ⅲ石塔」石田茂作監修『新版仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆　雄山閣

福江　充 1998『立山信仰と立山曼荼羅―芦峅寺衆徒の勧進活動―』岩田書院

古川知明 2011A「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』第164号　越中史壇会

古川知明 2011B「神通川石工とその周辺―近世石工と在地石材―」『大境』第30号　富山考古学会

古川知明 2011C「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』第10号

古川知明 2012「近世富山町石工について」『富山市の遺跡物語』第13号　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明・伊集守道 2008「医王山東薬寺の文化四年銘宝篋印塔下の埋納礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第27号

古川知明・蓮沼優介 2009「五穀山龍高寺宝篋印塔と礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第28号

前田英雄 1998「大山町内の石工の技―民家の石垣と石仏―」『土蔵』第10号　砺波郷土資料館土蔵の会

三木治子 1998「石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経(3)」『歴史考古学』第42号

三木治子 1999「石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経(4)」『歴史考古学』第44号

八尾町史編纂委員会 1967『八尾町史』

Ⅱ　月岡西光寺禅定窟測量調査

1　調査の経緯

富山市中布目に所在する曹洞宗布金山西光寺は、文明18（1486）年開基の曹洞宗大安寺の後進である。大安寺は、蜷川最勝寺4世貫翁龍珠の弟子雪天存康が開山し、明治3（1870）年合寺令により曹洞宗春日山光厳寺と合併した。明治6年大安寺信徒の要望により、有峰西光寺を招致し、現在地に再興した〔高瀬編 1994〕。境内には「稚児塚」と呼ばれる墳墓状遺構が残り、五輪塔が存在する。

禅定窟は、日韓合併（1910）記念に鐘衝堂を造った時発見され、その階段や鉄の扉を作った〔中村 1963〕。

昭和60年、西光寺西側の敷地内において駐車場工事が計画された。西光寺から、工事予定地内にある禅定窟の調査について富山市教育委員会が依頼を受け、藤田富士夫（富山市考古資料館主任学芸員：当時）が担当し、古川知明（富山市教育委員会社会教育課学芸員：当時）が補助して清掃及び測量調査を行った。

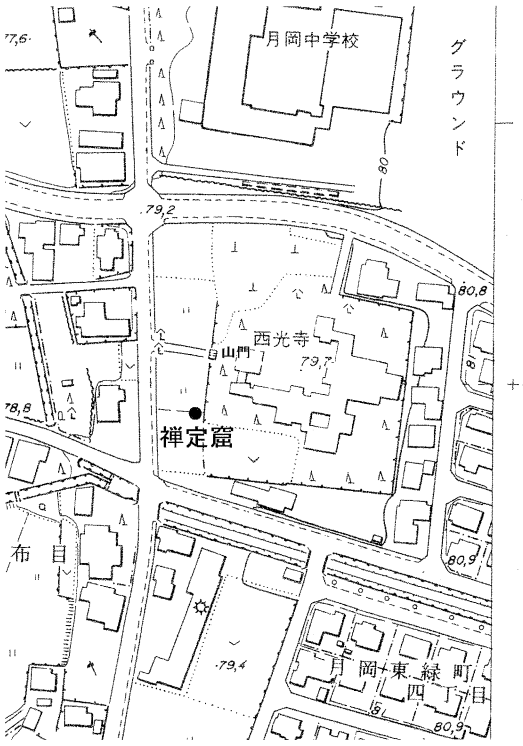


図1　禅定窟位置図（1:3,000）

西光寺の位置する中布目は、神通川支流熊野川の右岸扇状地上に立地し、熊野川は寺の南1.2kmに所在する。付近の標高は80mである。

禅定窟の位置は、西光寺山門から南へ23.5m、西へ1.75mの地点が、入口階段の基点である。

その後この禅定窟は現状保存された。そして入り口周囲が補修され、周辺敷地は駐車場に整備された。現在この禅定窟は埋蔵文化財包蔵地とはなっていない。

2　調査成果

禅定窟の構造は、地表から地下の洞窟に降りる階段部と、地下の穴本体からなる。

(1) 階段部

寺院のある東側から降りる構造である。全体を四角形に掘り込んでいる。大きさは、天端で東西3.0m南北1.9mで、階段8段を築造している。降りきった最下段には平場が築かれている。平場の大きさは、東西1.3m南北1.15mである。表面はコンクリートである。

階段はやや平たい割玉石を使い、割面を垂直に横一列に配列し、コンクリートで固めた段を計8段築造する。各段の石数は4個で、8段目のみ5石である。各段の幅は20～25cmである。

壁面は、割玉石・玉石を併用し、石の隙間および石の窪んだ部分はコンクリートで埋め、ほぼ平坦な壁面を作る。石の形状がわからないものも多い。使用されている石は、安山岩を主体とし、片麻岩・神通川産安山岩等雑多な石材である。安山岩は熊野川・常願寺川産と推定される。

(2) 入口・穴本体

東側に開口部をもつ穴である。川成礫層中に構築されているため、内部は円礫が多数露出している。

入口は、幅40cm高さ75cmと狭く、「一人膝を折って入れる」大きさである。

入口の手前には石造観音扉が設置されている。扉と上枠・両縦枠はすべて凝灰岩製で、扉1枚は縦64cm幅28.5cmの大きさである。扉には穴を穿ち鉄製金具が取り付けてある。扉軸材は4箇所に短い穴をあけ、短い棒で上枠・下枠と固定する。戸先側中央に付けられた引手金具は鐶型式で、径約

8cm である。その上方 15cm には、止め金具として打掛金物が取り付けられている。金具は幅 5.5cm、長さ 30cm の楕円形状の鉄板で、右が固定部である。

縦枠は、扉が入る内側が幅 1.5 cm 程度刳り込まれている。上枠の上には、粗加工した幅 132 cm 厚さ 8 cm の安山岩板状石が置かれている。

穴の大きさは、扉内面から奥へ 2.8m、最大高さ 1.65m である。穴全体の平面形は東西に長い楕円形であるが、その主軸は階段東西主軸とは 30 度偏向する。穴の底面は、扉内面から奥へ 1.4m 行ったところで 1.7m×1.0m の平面楕円形の平坦面を形成する。この面は階段下平場から約 90cm 低いレベルにある。扉から穴底面までの間は玉石が露出した斜面で、コンクリーが塗布され固められている。

穴の中位から下の壁面は、崩落防止のため、漆喰が塗られ固められている。

穴の底面直上あるいは数 cm 浮いて、板状の木片が計 8 枚出土した。壁に沿って置かれているものもあり、長いもので長 67cm 幅 4.5cm の大きさである。幅が細く短いものが多ほとんどだが、幅 11cm の不整形の板も 1 枚認められた。この板状木片の用途は不明である。

3　禅定窟の性格

この穴は「禅定窟」と呼ばれており、禅宗用語である「禅定」の言葉が使われている。禅定とは智慧を得る手段とされ、禅宗では禅定を得るために坐禅を重視する。また立山などの霊山に登拝し修行することも「禅定」といい、そこに至る道を禅定道・禅定往来と呼ぶ〔廣瀬・清水 1995〕。

西光寺（大安寺）は、富山町から長棟鉱山へつながる長棟道沿いに位置する（図 2）。長棟道には立山方面につながる立山道が交差しており、大安寺前にも西側からの立山道と呼ばれる道筋が通る。この道は長棟道と交差した所で止まっているが、大安寺期の山門は南向きであったという伝承の存在〔中村 1963〕から、その道は止まらずに大安寺南正門前を通り、黒牧道へと伸びていたのではないかと考えられる。この点から、大安寺の禅定窟の存在は立山禅定道との関わりにおいて理解できよう。

また、芦峅寺雄山神社（中宮）境内に所在する立山開山御廟の土饅頭は、開山の祖慈興上人佐伯有頼入定の地である。『寺社由来』所収の「中宮姥堂」条に「中比志賀都四条之郡主越中守佐伯有頼、承文武天皇之御勅、大宝元年より芦峅惣社伽藍ヲ建立シ、至今年九百八十三年。其後佐伯有頼深禅定ニ入、則廟所御座候」（井上校訂 1974）とあり、禅定の用語が使われている。ここでいう廟所は慈興上人墓、すなわち立山開山御廟のことである。立山縁起における慈興上人の「土中入定」行為に基づくものであろう（福江充氏の教示による）。この土中入定とは、土饅頭中に埋めることではなく、地下に穴を掘り、入定して後埋め、最後に土饅頭を作って廟所にする形が想定される。地下洞窟の所在は未確認であるが、これが事実であるとすれば、西光寺禅定窟のような形態がそれと同様なものと推定される。

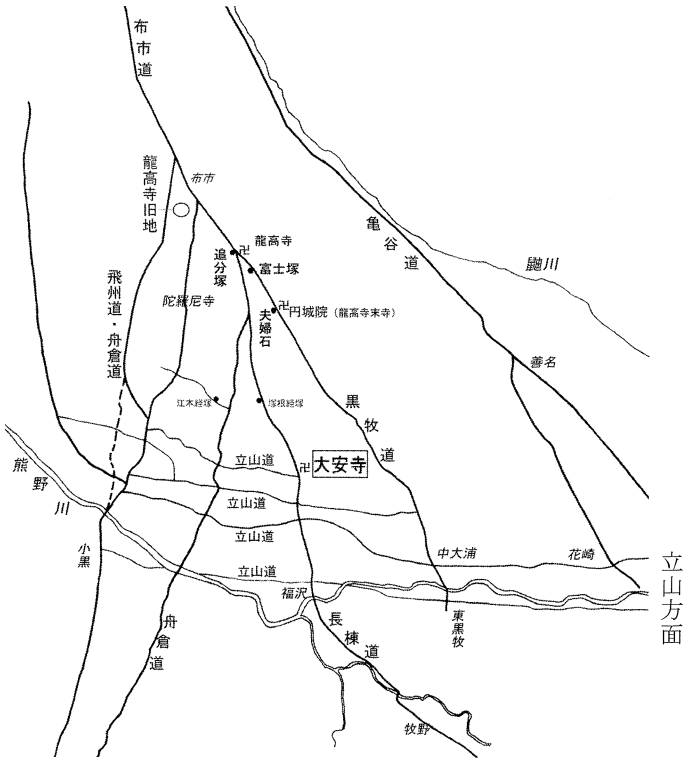


図 2　大安寺と周辺の街道

参考文献

井上鋭夫校訂 1974『加越能寺社由来　上巻』石川県図書館協会

中村太一路 1963『富南の歴史』

廣瀬誠・清水巌 1995『山と信仰　立山』佼正出版社

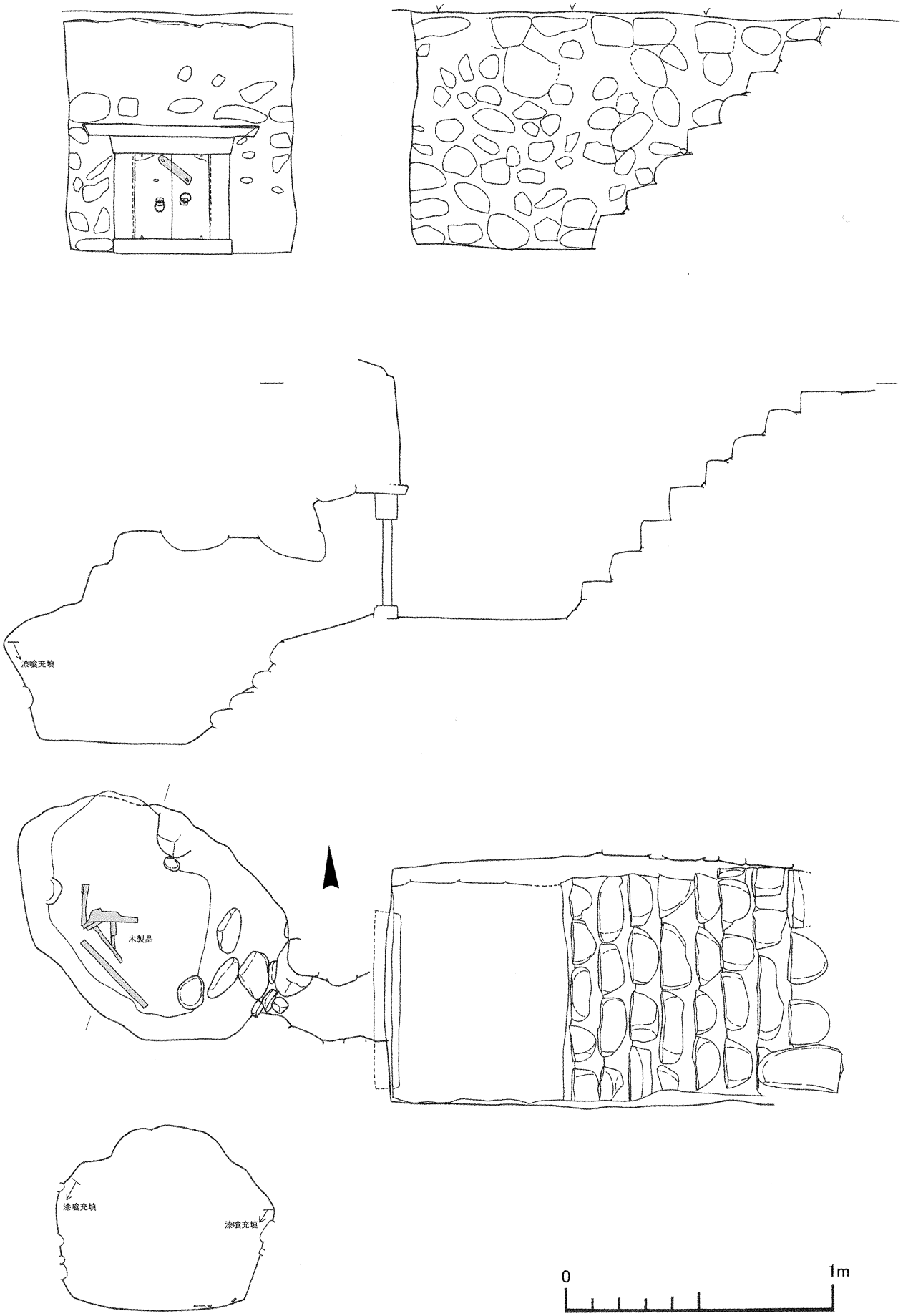


図１　禅定窟測量図

西光寺禅定窟（現在）

写真１　布金山西光寺

写真２　禅定窟現況（南から）

写真３　禅定窟現況（東から）

写真４　入口階段（西から）

写真５　入口階段側壁（北面）

写真６　入口階段側壁（南面）

写真７　禅定窟入口

写真８　禅定窟入口門扉

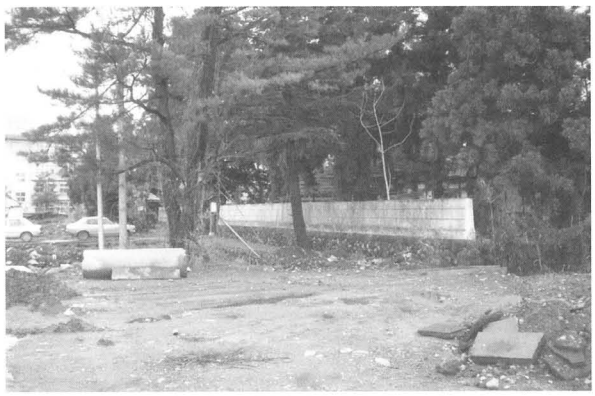


写真９　禅定窟の位置

写真 10　禅定窟の位置

写真 11　禅定窟入口

写真 12　階段部発掘風景

写真 13　階段部

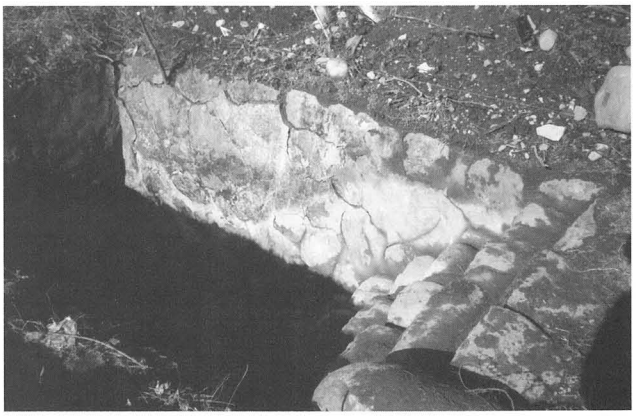


写真 14　階段・北側壁

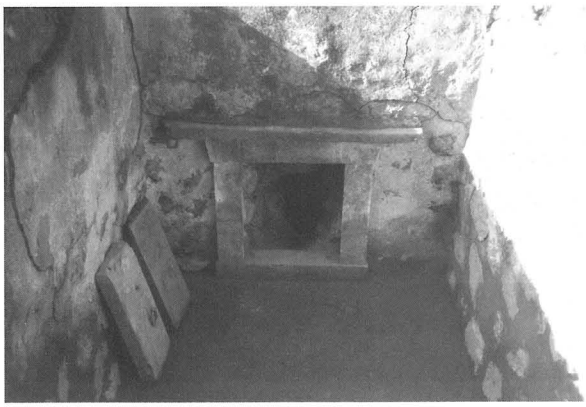


写真 15　禅定窟入口門扉

写真 16　禅定窟内部

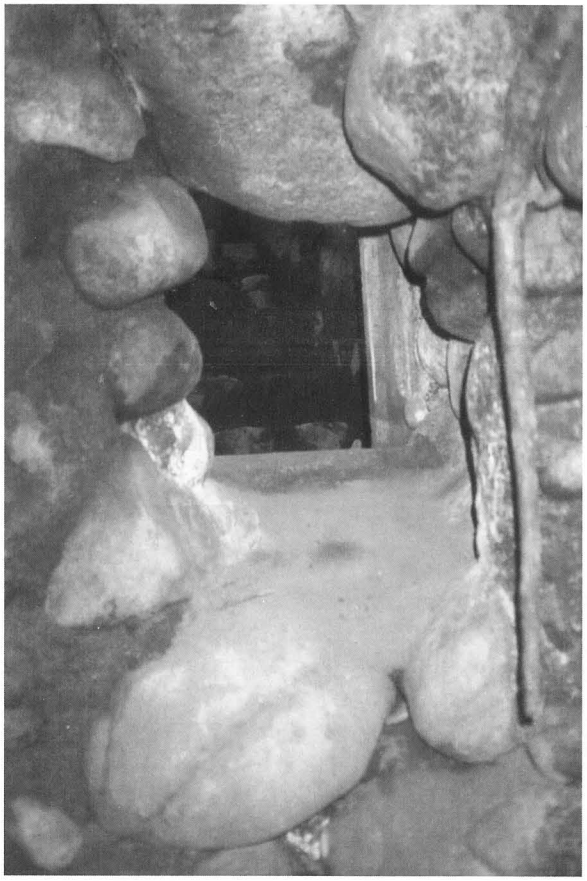


写真 17　禅定窟内部（入口）

写真 18　禅定窟内部の発掘風景

写真 19　禅定窟内部　木片の出土状況

写真 20　禅定窟内部　木片の出土状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましないせきぞうぶつとうちょうさほうこくしょ
書名	富山市内石造物等調査報告書
副書名	
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	52
編著者名	
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関所在地	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2-24　TEL. 076-442-4246
発行年月日	西暦　2012年3月30日

所収文化財名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
近世石造物（きんせいせきぞうぶつ）	富山市内各所	16201				20110113～20111214		文化財調査
禅定窟（ぜんじょうくつ）	富山市中布目地内　西光寺	16201		36度37分05秒	137度15分00秒	1985		

所収文化財名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近世石造物	宝篋印塔	江戸			個人墓地
	石仏・石塔	江戸			祇樹寺関係
	墓石	江戸			宝憧寺関係
禅定窟	信仰	江戸か	穴	木片	

要約

宝篋印塔は、江戸後期に活躍した常願寺川石工中川甚右衛門が製作したと推定される個人墓地の3基を記録した。
曹洞宗深谷山祇樹寺境内には宝篋印塔・三十三観音石仏・門前石仏等があり、享和2～文政5年25世俊英代に奉納された。三十三観音石仏・門前石仏は常願寺川石工中川甚右衛門が製作した。
真言宗長栄山宝憧寺住職墓には、常願寺川石工中川甚右衛門が製作した弥勒菩薩形墓石2基があり、各々開基弘全（天保元年頃）・八丁屋四郎兵衛血縁者（安政2年）の供養碑である。
曹洞宗布金山西光寺禅定窟は、扇状地礫層に掘られた地下式横穴で、前身の大安寺期のものと推定される。穴底からは板8枚が出土した。年代の決め手はない。立山信仰に関連したものか。

富山市埋蔵文化財調査報告52

富山市内石造物等調査報告書

発行日：2012（平成24）年3月30日
発　行：富山市教育委員会
編　集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町1丁目2番24号
TEL：076-442-4246
FAX：076-442-5810
Email：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷：前田印刷株式会社